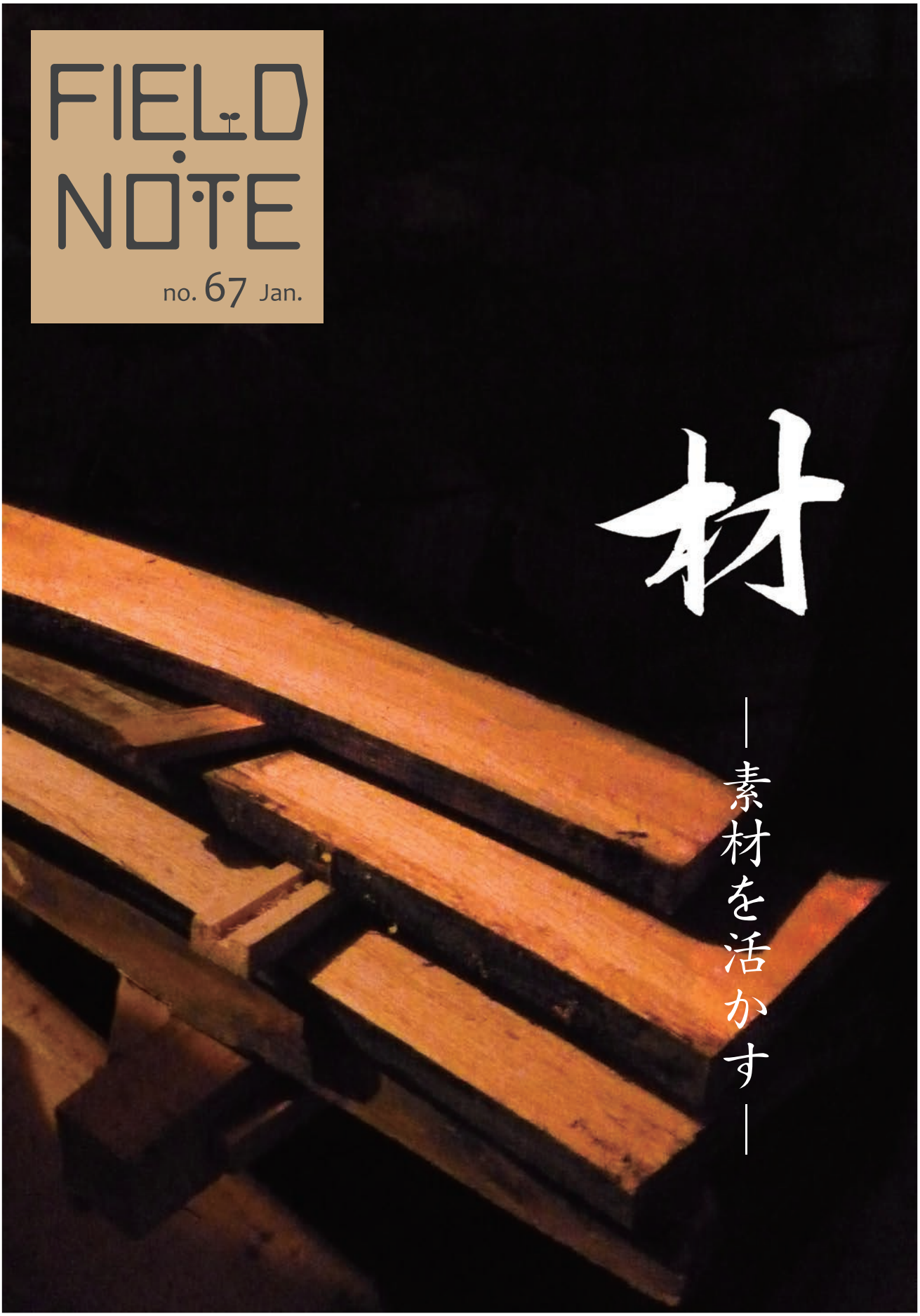
FIELD NOTE

no. 67 Jan.



材

―素材を活かす―

耕し暮らす

毎年10月になると、清水さんは稲を刈り終えた田を耕し、水掛菜の種を蒔く。今年は腰を痛めて田んぼをしなかったが、「まだ痛むけんど、家にこもってちゃだめだ」といい、水掛菜の世話に精を出している。12月には左頁写真のように青々と育ち、収穫できるようになる。

都留市十日市場にて　清水貞一（しみずていいち）さん（87）
――2010年10月7日

FIELD NOTE

2011. 1　no. 67

表紙写真：香西恵
ギャラリー写真：北垣憲仁

特集

4 材 —素材を活かす—

6 一つの欠片から —色と光のモザイクアート—

9 木を生かす

12 「材料」になった家や庭

15 蔓採りから始めるカゴづくり

19 おわりに

特別企画

20 **8周年に寄せて**
—歩いて、見て、聞いて、綴る
『フィールド・ノート』を続けて広がる世界

人と文化に耳を傾ける

24 小さな図書館

26 馬と人の暮らし

28 あったかい場所
—泰安温泉—

歩く・自然と親しむ

30 〔連載〕森歩きの野帳から
第2回　ツキノワグマが暮らす森

32 〔連載〕フィールド・ミュージアムのたのしみ
第11回　毎日、見ること
自然の息吹を伝える水の流れ

36 山梨をゆく

39 ムササビライブカメラ奮闘記

40 大桑山便り

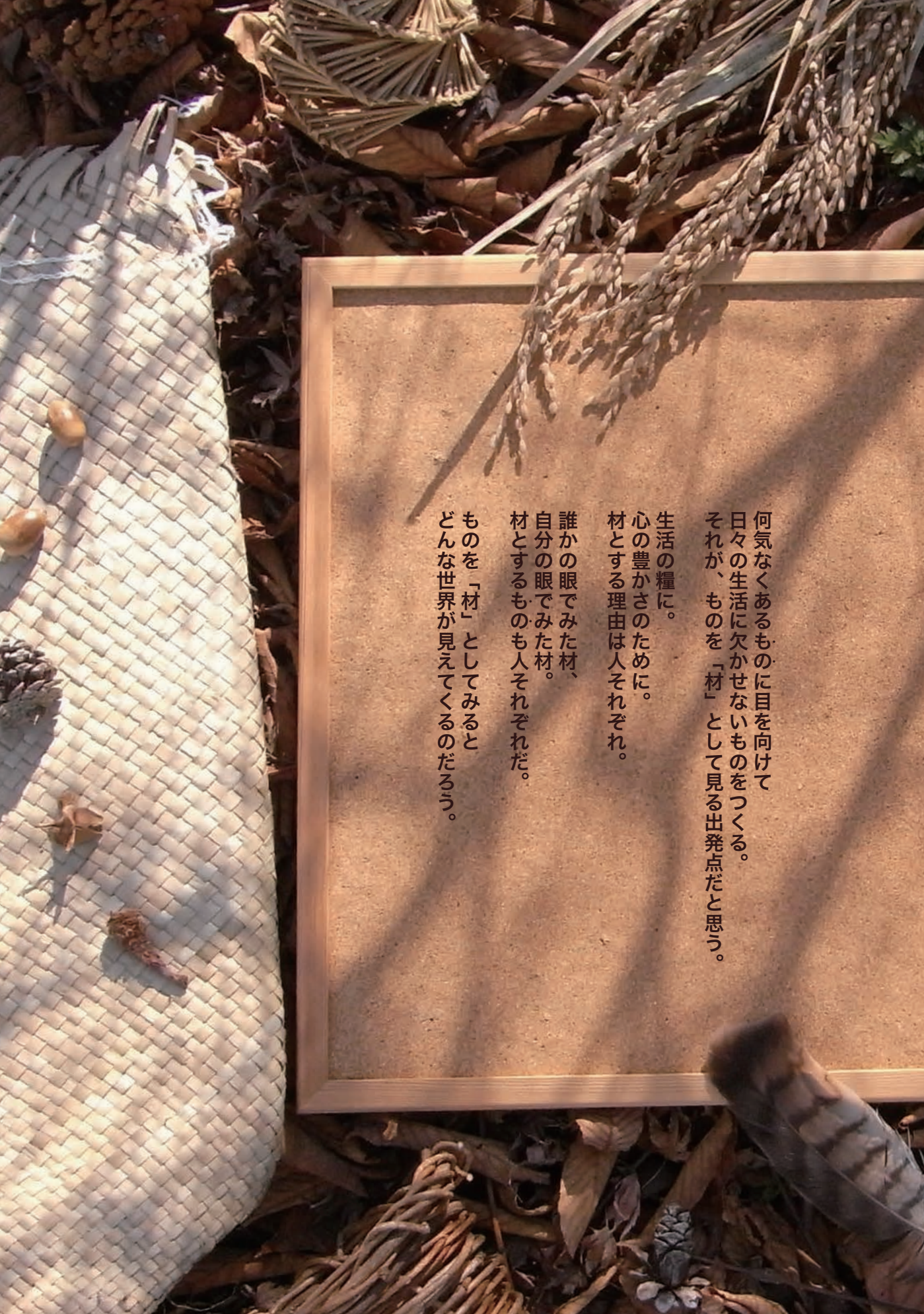
42 フィールド暦

44 Field Note News

46 編集後記

『フィールド・ノート』では、「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン　森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow　Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

材
素材を活かす

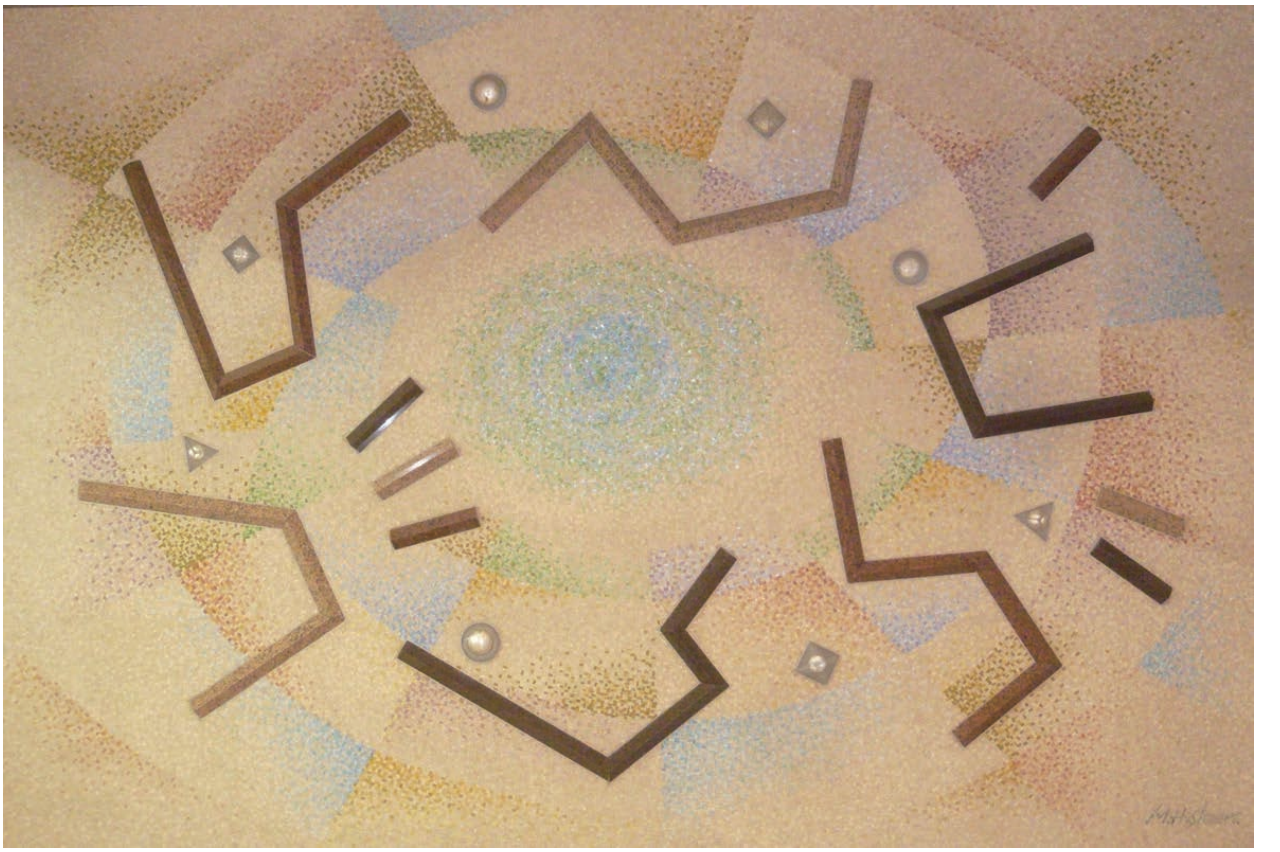


何気なくあるものに目を向けて
日々の生活に欠かせないものをつくる。
それが、ものを「材」として見る出発点だと思う。

生活の糧に。
心の豊かさのために。
材とする理由は人それぞれ。

誰かの眼でみた材、
自分の眼でみた材。
材とするものも人それぞれだ。

ものを「材」としてみると
どんな世界が見えてくるのだろう。



本学附属図書館エントランスに展示してある作品『WA』

一つの欠片（かけら）から

—色と光のモザイクアート—

大澤かおり（社会学科２年）＝文・写真

「アトリエ　ハシムラ」。モザイクアート作家のアトリエだという。本学附属図書館に展示してある作品『ＷＡ』はその人の作品だと聞いて、私もじっさいに会ってみたくなった。華やかでありながら優しい色が散りばめられた壁画。これをつくったのは、いったいどんな人なのだろう。

モザイクアートの世界

11月8日午後1時。車から都留の紅葉を眺めつつ、アトリエの主宰者である橋村元弘（はしむらもとひろ）さん（67）のもとへ向かった。朝日馬場から上野原市へ向かう道路沿いにぽつんとある「アトリエ　ハシムラ」の文字。よく見ると、これもモザイクアートでできている。

ちょうど家から出てきた橋村さんに挨拶をすると、アトリエに招き入れていただいた。資材が積み重ねられたそこは、職人の作業場といった印象だ。明かりをつけていない部屋は、昼過ぎにしては光があまり入らない。

「アトリエっていうのは光が入らないようにつくるものなんだよ」

制作の過程で強い光が当たると、正確な色が見えなくなってしまう。モザイクアートは色や光を強く意識するというから、とくに注意が必要なのだろう。部屋を見回してみると、

日光が差しこむ窓には板を貼り、部屋の蛍光灯には和紙をかけた跡がある。光を広い範囲に散らしたり、逆にスポットライトを当てたり……と、制作するときばかりでなく、展示するときの光の当て方にも気を使うようだ。

これまでモザイクアートに馴染みのなかった私には、普通にタイルを貼ることとモザイクアートの違いがどこにあるのかがわからなかった。作品をぼんやりと見ていてきれいだな、と思うけれど、並べられた欠片たちがどうしてこんなにも美しいのだろう。

その疑問を投げかけてみると、橋村さんは正方形のタイルをいくつか取りだしてきた。まず、タイルを丁寧に等間隔で並べていく。「これはタイル屋さんの貼り方」。そう言って、タイルを崩してもう一度並べ始めた。今度はタイルを傾けて置いていく。

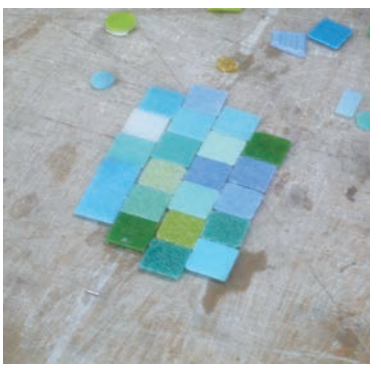
間隔がちょっと近かったり逆に遠かったり、ごちゃごちゃしている。けれどなぜだろう。さっきの綺麗に並べられたタイルよりも活きいきとしているように見える。

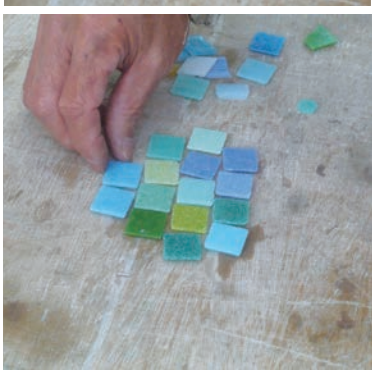
「リズムがあるんだよね。こうやって何も考えずに置いていけるようになるまでが難しい。気合いが入っちゃうと逆に駄目だったり」

タイルとタイルの隙間からあふれてくる表情は、橋村さんの積み重ねてきた経験と磨き上げてきたセンスによるものだったのだ。

モザイクアートはおもに石やガラスを使う。橋村さんは、ほかに色々な素材を加えて作品をつくり上げることが多い。七宝焼きをアクセントとして配置したり、木材を取り入れてみたり。ほかの素材で表現するアーティストと一緒に作品をつくることもある。『WA』でも使われている、なかに銀箔をとじこめたガラスは、合作したガラス作家の手によるものだ。

モザイクアートの枠に収まらず、展示する場所に合った作品をつくろうと考えているそう。探求心にも似た自由な発想が、橋村さんの作品に広がりを与えているのだろう。





タイル貼りのようにきっちりと並べられたタイル（上）と、モザイクアートを意識して並べられたタイル（下）

自然の力

どの素材を使うのが好きですか、と尋ねてみた。どんな素材にもそれぞれ違った良さがあるけど、と前置きしつつ「やっていて一番面白いのは大理石だね」と語ってくださった。ガラスは色がすでに決まっているので、そのなかから選んでいけばいい。けれど、自然石になるとそうはいかない。一つの塊のなかにも、色味の違いがある。橋村さんは、その色を石のもつ自然の力だと言う。モザイクに適した大きさに石を割ることは、単純に形を揃えていくだけではない。色をつくることでもある。「割った石も一つの作品になってる」。

自分で石を割っていって、自分で色を選び出す。そうやってつくり上げた色を活かすのも、また自分自身。つくり手のもつ並べ方のこだわりやくせによって、作品の雰囲気はがらりと変わる。だから、橋村さんは直接自分の手で素材を貼り付けていくことをモットーにしている。

モザイクアートに使う石を割る橋村さん

アトリエに飾ってある、大理石だけで作った作品を見せていただいた。赤から橙へ、橙から赤へ。温かみのあるグラデーションが心を落ち着かせる。橋村さんが自然の力と言っていたように、石の色は人間の手ではつくることができないものだ。けれど、石の塊のままではこのグラデーションは見られない。自然の力と橋村さんの力が合わさったとき、はじめてモザイクアートという作品が出来るのだろう。

橋村さんの作品は、作品の周囲の環境との調和を大切にしている。依頼主からは「せっかくつくるのだから、目立つようにして欲しい」と言われることが多い。これまで自分を強く主張する作品を幾度となく目にしてきた橋村さんは、そうではない作品をつくりたいと言う。じっさい、『WA』も大きな作品なのに、まるで最初からそこにあったかのように馴染んでいる。そして、年月が経てば石の表情もまた変わる。床に貼ったモザイクは道ゆく人々の足跡にもまれ、しっとりとしてくるらしい。作者の手を離れてからもなお変化していく。それもモザイクアートの魅力なのかもしれない。

一度、白い壁に白い素材で作品をつくってみたいのだとか。「そんな注文をしてくる人はいないけど」と橋村さんは苦笑いをした。

「欠片」を繋ぐ

芸術家と呼ばれる人に直接会ったのは今回がはじめてだ。これまで私は芸術に対して見る側の人間であるという意識が強かった。芸術家は自分とは縁遠い存在だったのだ。

けれど、橋村さんの話を聞いたり、作品を見せていただいたりして、素材や作品へのこだわりに驚いた。どんな色をつくるのか。どこにどの色を置くのか。欠片の一つひとつへのこだわりが集まってできたのが橋村さんのモザイクアートだ。今まで漠然と見ていた芸術作品も違って見えてくる。細かいところに宿る芸術家の心を見逃さないようにしたい。鑑賞する側しか知らなかったときには考えなかったことだ。

そして、驚くのと同時に共感している自分にも気づいた。私もうまい文章を書きたいと思う一人として、言葉の一つひとつに自分なりのこだわりをもっている。言葉のもつ力を借りながら、自分の力で繋ぎ合わせていくところは、もしかしたらモザイクアートと似ているかもしれない。文字と絵画という違いはあるものの、表現する者同士なのだと考えたとき、以前よりも芸術が身近に感じられるようになった。私も自分にしか書けないものを大事にしながら、もっともっと言葉の力を引き出すような文章を書いていこう。自分の遥か先を走る「先輩」を見ながら、そう思うのだった。

橋村元弘　プロフィール
1943年生まれ。多摩美術大学卒業後、アニメーターや映画の美術監督助手を経て、モザイクアート制作会社に勤める。のち、75年に独立。91年都留市朝日馬場にアトリエをかまえ、以後都留を拠点に活動している。

木を生かす

富士急行線 都留文科大学前駅の待合室に
オニグルミの木のベンチがある。
すべらかな触感でしっとりと手に馴染む。
どんなかたがつくったのだろう。
10 月 26 日、上野原市秋山に工房をかまえる
有馬保男（ありまやすお）さん（63）に会いに行った。

香西恵（社会学科 2 年）＝文・写真

都留文科大学から車で30分ほど。新雛鶴（しんひなづる）トンネルを抜け左手に入るとすぐ、背の高いスギに囲まれて、沢のそばに小屋が見える。Studio Y.E'S（スタジオワイイーエス）の工房だ。

迎えてくださったのは有馬保男さん、奥さんの石塚えみこさん（54）、息子のこうじさん（22）。食堂で温かいブルーベリーの紅茶をいただく。食卓の椅子とテーブルはもちろん、この家も有馬さんの手づくりだという。

「家具は使ってもらって初めてよさがわかるもの」とえみこさん。たとえばちょうどよい高さだとか、手に馴染む触り心地だとか。毎年春に、代官山で展覧会を開いている。そのほかにも藤野でスツールづくりのワークショップを開いたり、上野原駅前では、ここの家具をおいたレストラン「ゆめキッチン」を開いたりしている。

気になっていたオニグルミのベンチについてたずねると、あれは春、展覧会で忙しいときに急いで仕上げた、焼印を押し忘れてしまったと笑いながら有馬さん。

有馬さんはもともと新宿で設計の仕事をしていた。現場で大工さんの技を「ぬすみながら」、趣味で家具づくりを始める。えみこさんはグラフィックデザイナー。子育てを機に二人でこの山へ移り住んだ。以来約22年間、家具づくりの工房を営んでいる。

材を生かす

始めたばかりのころは材の調達に苦労した。徐々にルートを開拓していった。使うのは主にこのあたりに生えている木だ。

「木は伐（き）って終わりではない。息をしている」とえみこさん。湿度の高いこの森で呼吸して育ったものを、乾いた東京へもって行けば、当然くるいがでる。「わたしたちが東京へ行ったら肌が乾燥するように」慣れない環境の変化が、家具にあらわれてしまう。木が育ってきたところと同じ環境で使うことで、家具は長もちするのだ。

使う材の樹種はスギやヒノキ、クルミ、カシ、ケヤキ、クリなど、さまざまだ。柔らかさ、堅さ、色、質感の違いで選ぶ。木のなりをみて、できあがりをイメージする。これが「序章」とえみこさん。有馬さんは「木が立っていたときの状況を残しておきたい」という。たとえば今使っている食卓のテーブル。ふちは、木の面皮（めんぴ）の曲線をそのまま生かしている。

木の形だけではない。たとえば人工乾燥させた材は水分だけでなく、樹脂などの成分までとんでしまって、木の本来の性質が失われてしまうという。

Studio Y.E'Sでは自然乾燥に近いやりかたをしている。最低でも1年屋外で自然に乾かしたあと、35度の乾燥室に移して2〜3週間寝かせる。カシやナラなど、密度の高い木なら、さらにもう1年はかかるそうだ。こうして時間をかけて乾燥させた材は、木の香りが違うという。木の「質」も、材の扱いかたによって大きく変わるのだ。

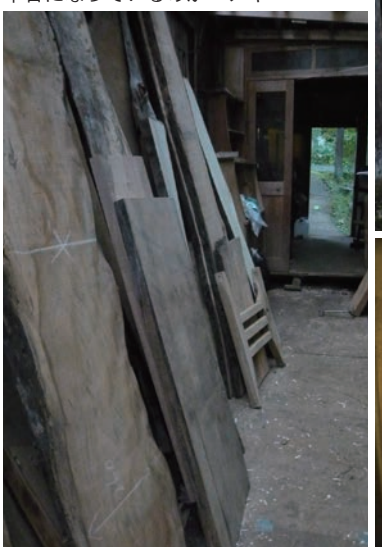
どこの木を使い、そのなりや質をどう生かし、できあがったものをどこで使うのか。材を選び、つくり、使う。初めから終わりまで、どうやったら木が一番生かされるかという姿勢のもとに、Studio Y.E'Sの家具はうみだされていく。

工房のなかを案内していただいた。外にはカシやエノキの板材。一緒に立てかけてあるのはつくりかけのテーブルの脚だ。な

駅の待合室にあるオニグルミのベンチ

かに入ると壁にたくさんのクランプ（作業するとき、材が動かぬよう押さえる道具）が吊るしてある。台の上には使いかけの鉋（かんな）と鑿（のみ）、金槌、仕上げに塗るオイルの入った丸いケース。オイルは材の水分が蒸発するのを防ぎ、くるいをでにくくする。材を乾燥させるための部屋にはヒノキの板材が寝かせてあり、暖かな部屋いっぱいに木の香りが満ちていた。

右上：外からみた工房／右下：壁に吊してあるクランプ。長いものから短いものまでさまざまな大きさのものがあった／左：カシやエノキの板材。白地にこげ茶色のマーブル模様のような木目になっているのがエノキ



「木は時間の旅人」

木でできた家具は、使っているうちに磨かれて、つやつやと輝きを増していく。暮らしのなか、長いあいだ使われるなかで、木の内側の美しさがあらわれてくるのだ。

有馬さんは「木は時間の旅人」という。立ったままのかたち。家具になったかたち。姿を変えて、長い時間の旅をする。

木は倒れて死ぬのではない、まだ生きている。伐って、材として加工するからこそ見える美しさがあること、家具として使うからこそ、木はより長い時間を生きられるのだということを思った。

私は高校のとき、木工の授業で、ケヤキの板材から器を彫りだしたり、カシの原木から椅子をつくったり、木に触れ、鑿と木槌と自分の手で、自分の思い描いたものを彫りだしていく経験をした。それは私にとって木と向き合い、そのことで自分と向き合う、大切な時間だった。大学に入ってから、そうした時間をもっていたいと思いながらもずっと遠ざかっていた。

鑿で彫った跡の、木のつややかな、硬質な輝き、捨てるのがもったいないくらいの一つひとつの削りくずの美しさ、一彫りひとほり自分の手で彫り進めていく充足、たちのぼる木の香（か）。そういったものが、Studio Y.E'S を訪ねて再び目の前にあらわれた。

お二人のお話を聞きながら、自分の思いが重なり、驚いていた。私は技術や経験もない素人だ。けれども木を「時間の旅人」という有馬さんや、「木は息をしている」というえみこさんの、木について楽しそうに語るようすからは木への親しみ、愛着のようなものが伝わってきて、私は自分の木に対する思いや充足を思いだしていた。経験がなかったり技術がなかったりすることは、木と対するときに些細なことにすぎないのかもしれない。そんな違いを超えて、こうしてお二人のお話に共感し、わくわくすることができて嬉しかった。

「材料」になった家や庭

下吉田にある「ポニ」というお店には、手のひらにのる、トタンでできた入れものが置かれています。小屋を取り壊して、いらなくなったトタンを使っているという。いくつも並んだ姿は小さな住宅街のよう。つくったのは鈴木鑛治（すずきこうじ）さん（67）。本職ではないとのことですが、いったいどんなかたなのでしょうか。

約束をしていた午後7時よりも、10分ばかり早く着いた。近くにある富士北陵高校では、運動部が練習をしている。グラウンドに向いた橙色の明かりは、鈴木さんのお宅をぼんやりと照らし出していた。見上げた先には、背の高いホオノキがドンとそびえ立つ。

「いらっしゃい」と案内された応接間。この板間で鈴木さんはものづくりをする。針金でつくった置物や、ゆきま棚と呼ばれる、高さ60センチほどの小さな机が3つ。壁には一期一会と書かれた大きな藍染めの布がかかり、ホオノキの花の芯がヒモでくくって飾られている。片隅にはイスに似た形の薪ストーブ。中央にある分厚い机の板は、鈴木さんのおばあさんが裁縫をするのに使っていたもの。脚をつくったのは鈴木さんだ。

「板に脚を置いただけだから」、柱状の脚を寝かせるか立てるかで高さを調節できる。部屋の中心にどっしりと構えるテーブルのほかにも、鈴木さんのつくったものは部屋のあちこちに飾ってあったり潜んでいたり、〈待機〉していたりする。というのも、人から頼まれてものをつくることがあるからだ。

たとえば部屋に置かれたゆきま棚や、「ポニ」に並ぶ入れものがそう。ゆきま棚はもう少ししたら依頼主のところへ届けられる。「ポニ」に並ぶ入れものは、店主につくって欲しいと頼まれたのだという。「お金をもらうのは気が引けるから」。受け取るのはたいてい材料費だけだ。

「ものをつくってそれで食べてる人って大変だと思うよ。大きな家具は（値段が高くて）なかなか売れないけど、こういうスプーンとかだったら欲しいって言う人は結構いるんだよね」

鈴木さんは工業分野の学校へかよったわけではなく、ものづくりで食べていこうとも考えていない。けれど、つくったスプーンはきれいな形をしていて、プロと呼んでもよさそう。でも、それをゆるゆると否定する。どうしてだろう、ものづくりを商売にしている人への敬意なのだろうか。

「昔からつくるのが好きだったんですか?」私の問いに鈴木さんはパッと顔を明るくして、そうそうという。鈴木さんのおじいさんは、よくいろいろなものをつくる人だった。お兄さんと一緒におじいさんの後に続いて

右：大小や色、形のさまざまなスプーン。円形のスプーンの中央から放射線状に年輪がつくように削っているものもある ／ 中央:スプーン、笛、カキ渋で染めたコースター。コースターは地区の生涯学習活動の一環でつくったそう／左：自転車・三輪車シリーズ。左が初期のもの、真んなかは最近つくったもの。一番右は二輪車で、スタンドがついている

は、つくっているようすを見ていたそうだ。

鈴木さんは自分自身をプロと呼ばない。とはいえ、作品はとても丁寧な仕上がりだ。何年も前からたくさんつくり続けているという針金の三輪車。つくり始めた当初のものと、最近つくったものを並べれば、一目瞭然。針金の巻きは隙間なくきゅっと詰まっているし、地面をなめらかに走る、バランスのとれた形に改良されている。

スプーンになった床

「ヒマにまかせて」いろいろなものをつくる鈴木さん。今住んでいる家のリフォームにも関わったそう。ここはこうしよう、あそこはああしよう。大工さんと一緒に現場でアイディアを出し合って改築を進めたと言う。

鈴木さんは部屋の奥から箱を取り出し、木のスプーンを見せてくださった。大きさや形、色はみんなばらばらだ。

「これはサクラ、それはニセアカシア……これは床材」

改築をすると、どうしても不要な材木が出る。鈴木さんはそれを使ってスプーンをつ

くっていたのだ。「燃（や）すか彫るかの違いだから」。鈴木さんは私が驚いているのを、おかしそうに笑いながらいう。

薪ストーブの横にそのまま置いてある板も、かつては鈴木さんの家の一部だった。目の前にあるスプーンが、その昔、足で踏んでいた板とは不思議な気分だ。鈴木さんの出した箱には、木の枝でつくった笛も入っていた。親指くらいの大きさで、芯をくりぬいてある。これは庭の枝を剪定したものだそう。

「材料はいくらでもある」

顔をほころばせて「材料」の話をする鈴木さん。床板をスプーンにする見方や、庭の木を笛にする視点。鈴木さんは、自分だけのとっておきの秘密をもっているみたいだ。うれしそうな笑顔がうらやましい。

お礼を言って鈴木さん夫婦のお宅をあとにする。振り返って見た家は、庭の木というより「材料」に囲まれて見えた。

「材料」を見つける楽しみ

鈴木さんのお宅を訪ねた翌日。私は木でバターナイフをつくった。手のひら大の平らな板をカッターで形づくる。つくり方から考えたくて、あえて説明書を見ずにとりかかった。

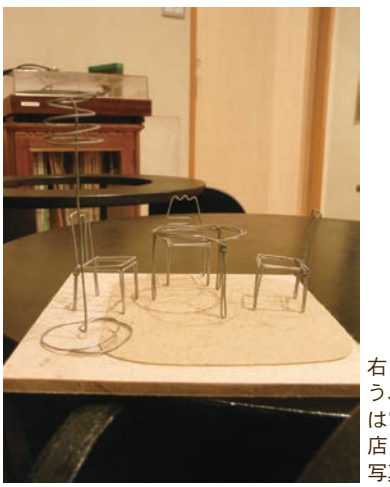
薄い板をじっくりと見つめてつくりたい形をイメージし、じっさいに握ってみて、持ちやすいように削る。思い描いたものを形づくるのは楽しい。そろそろ終わりにしようかと思っても、なかなか手が止まらなかった。

不思議だったのは、ものづくりの楽しさをひとつ味わったあと。棒付きのアイスを食べ終えて、ふとアイスの棒に目をやる。角の丸くなった小さな板が、ぱっと小さなバターナイフになった姿が頭に浮かんだのだ。

鈴木さんを見ていると、材を見つけることは、自分だけのとっておきを見つけることでもあると思う。あぁでもない、こうでもないと手を動かしてものをつくっていると、新しい「材料」が目に入ってくるのだ。

今思えば、鈴木さんのうれしそうな顔はどこか得意げだった。私自身、胸を張って自慢できる「材料」を見つけて、鈴木さんのあの笑顔に自分も近づきたい、そう思った。

石川あすか（社会学科3年）＝文・写真



右：イベント用に頼まれてつくったという、針金のテーブルセット。中央のイスは富士山を模している ／ 左：下吉田のお店に並ぶトタンの入れもの。８ページの写真も同じ

蔓（つる）採りから始める カゴづくり

ミカンをたくさん机の上に置きたいけれど、適度な大きさの入れ物がない。そんな時、ひょいひょいと蔓を採ってきて、パッとカゴを編めたらかっこいいと思う。でもどんな蔓が編むのに適しているのだろう。どうやって編むのだろう。右も左も分からないところから始まった、蔓を使ったカゴづくり。いろいろな楽しみが詰まっていました。

石川あすか（社会学科３年）
市太佐知（国文学科３年）
香西恵（社会学科２年）
狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里）

参考文献
自給自足 vol.25
株式会社第一プログレス Daiichi Progress 発行

おすすめの蔓。

アケビ
ミツバアケビとアケビ（５葉）とがあります。今回採ったのは５葉のもの。実が落ちていてアケビとわかります。蔓は芯があって力強いです

ノダフジ
表面はすべらかで弾力があります。地を這うものはたくさんのひげ根がついています。アケビと同様にとてもしなやかで編みやすいです。今回採りに行ったときはまだ葉が残っていました

採ってきました。

準備するもの
ハサミ、鎌、軍手、歩きやすい服装と靴、クマ鈴など

10月26日、雨上がりの大学の裏山に、蔓を採りにいきました。30分ほど歩いて、落ち葉の上にアケビの実がいくつも落ちている場所にでます。直径3センチはありそうな太いアケビの蔓が、樹上から何本もぶらさがっていました。体重をかけてひっぱると、木の枝ごとたわんで手元に引き寄せられてきます。巻きついている蔓を解き、適当なところでカマで切り、収穫します。アケビはかごづくりの材にむいているようだと本には載っていたものの、じっさいにあったのはとても太いものばかりで驚きました。ねじれた太い蔓はざっくり巻き取るだけでも、そのままでおもむきがあり立派です。

編みやすそうな細めの蔓を探します。ぶらさがっているのは太いものばかりで、地面を這っているものをとりました。落ち葉のなかから見えているところをひっぱってみると、ずるずるとつながってでてきます。辿っていくと、太い蔓にいきあたり、さらに続いていきます。落ち葉の下を縦横無尽に、蔓が幾重にも張り巡っているのです。その力強さに驚きながら、細いところを少しずつ巻き取って収穫しました。鎌で切ると、植物の青い匂いと泥の匂いの混ざった、ゴボウのような匂いがしました。

地を這うノダフジの蔓

この日は結局、太いアケビの蔓と、地を這う細めの蔓をいく巻きか収穫。地を這う蔓は、葉の形をもとに調べてみるとノダフジの蔓らしいとわかりました。

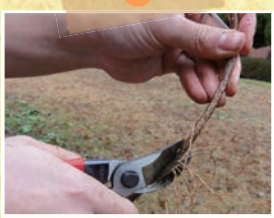
採ってきた蔓は適当に輪に束ねて風通しのよいところに干しておきます。これで、かごつくりの材が揃います。

つくってみました。

01

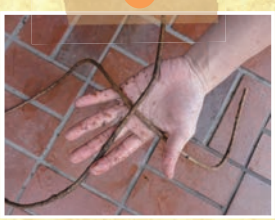
干しておいた蔓はあらかじめ水に浸けておきます。季節によって浸けておく時間は異なります。今回はアケビとノダフジの根を使いました。

02



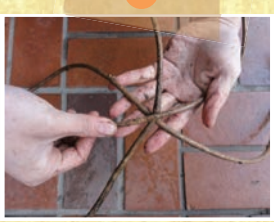
細かい根が気になる場合は、ハサミで切り取ります

03



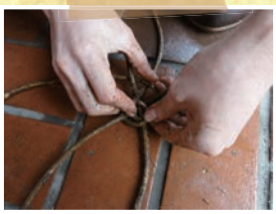
つくりたいカゴの高さを決めます。その２倍の長さの蔓を２本用意して。それらを十字に交差させます

04



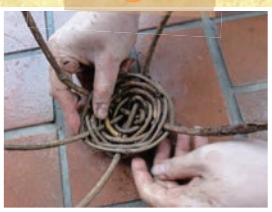
先ほどの蔓より少し長めのものを、斜めに重ねます

05



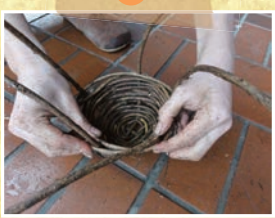
一番上に重ねた蔓の長いほうを、巻きつけていきます。縦材となる隣の蔓に上、下、上、下と交互に編んでいきます

06



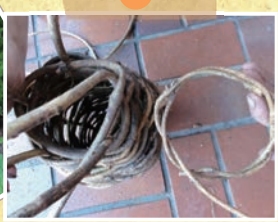
蔓が短くなってきたら、一度絡ませて留め、別の蔓を足して編みます。蔓の端が外に飛び出たり、上下の編み目が逆にならないように注意

07



底ができたら側面をつくっていきます。縦材が立ち上がるように編みます

08



カゴの口の直径と同じくらいの大きさの輪をつくります。余った縦材は、この輪に巻きつけて仕上げると、出来上がりがよく見えます

できあがり！

材としての蔓を考える。

手探りの状態から始まったカゴづくり。はじめは蔓との格闘でした。

ぐねぐねと曲がる蔓をむりやり編み込んでいくには相当な力が必要です。編み目から外れた蔓が跳ね上り、勢いよく顔に当たることも。つくっているあいだはとにかく必死。蔓を活かすなどと考える余裕はありませんでした。およそ3時間かけて、ハサミが入るくらいのカゴができました。

見た目は良くありませんが、それでも案外かたちになるものだとしみじみ思います。それはなぜかと考えると、蔓の微妙な色の移り変わりや、その細かなしわやしなり、そこから感じ取れる立体的な質感などが、カゴに「動き」を与えているからだと思います。面白みのあるカゴに見えるよう蔓が助けてくれている、といった印象です。たとえカゴの形が良くなくても、思わずじっと見てしまうのです。

つくりたいカゴの大きさにもよりますが、カゴ一つつくるのには意外とたくさんの蔓が必要です。山へ足を運ぶことを重ねていくと、「あの蔓の太さはカゴづくりにちょうどいいなぁ」と、その出来上がりを想像しながら蔓を材として見ていることに気づきます。つくり手の眼で蔓を見つめ、材として最適なものを探し出す楽しみがありました。

その後も山から蔓を採るたびに2つ目、3つ目とつくっていきました。しなりが強すぎる蔓は、編み込んでいくというより引っかけていくという視点が大切だということ、蔓のざらざらとした表面がちょうど良い滑り止めとなって、編み込んでいくのにそれほど力は必要がないことなどに気づいていきます。つくっていくうちにこだわりがでてきて、うまくいかないなぁ、と思うことばかりです。それでも最初の不安はどこへやら。蔓という材との上手な付き合いかたが、少しずつ分かってきたのです。

※蔓採りに出かけるときは、その土地や山をどなたが所有しているか確認しておきましょう。許可をきちんとをもらってから出かけたほうが、より楽しい蔓採りになるはずです。

おわりに

ものを「材」と見ること。
それは別の何かをつくりだそうとすることでもある。
その「材」を活かそうとすることは
自分自身の考えるつくりたいものと、
材のもつ個性とのちょうどいいところを
探していくことなのだと思う。

どうつくれば、長生きするか。
どうつくれば、みつけた個性がきらりと光るか。

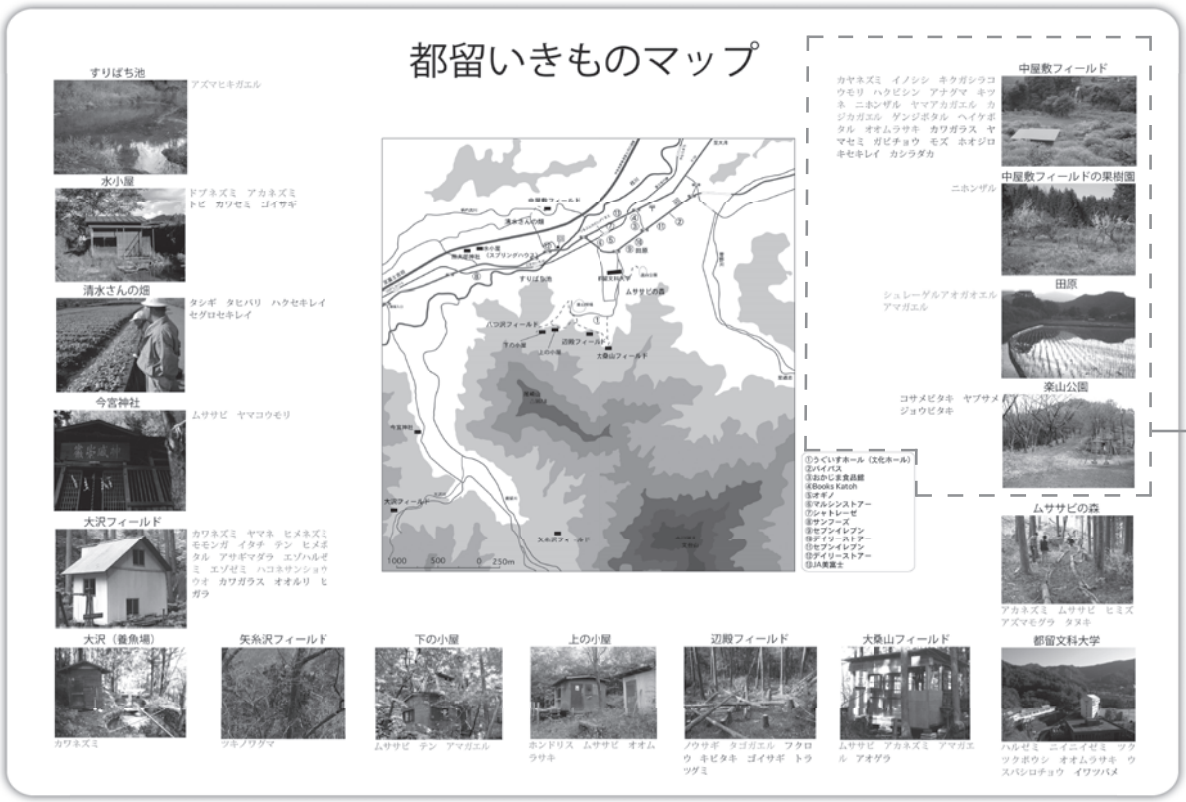
材のもつ形に惚れこんだら、なるべくそのままに。
材のもつ個性と自分のイメージが違えば
ちょっとずつ調整して折り合いをつけていく。
こうやって材と向き合うことは、
自分自身と向き合うことでもある。

誰かと話をしていて
自分のことが分かっていくように、
材と向き合うことで
自分のことも少しずつ分かってくるような気がした。
そして材とのうまいつき合い方は
お互いを活かすことへとつながるのかもしれない。

8周年に寄せて

『フィールド・ノート』は今年度で8周年を迎えました。2002年から2010年までの年月を振り返ると、変わったもの、変わらないものがたくさん見えてきます。今回「都留いきものマップ」（2004年作成）に掲載されている写真をつかって、2004年と2010年で撮った同じ場所を比較し、時間の移り変わりを見つめました。

『フィールド・ノート編集部』＝文・写真



中屋敷フィールド

2004年

小屋の奥にもう一件（白矢印）、小屋が建てられました。川ぞいの田んぼでは、渡邊宗男（わたなべむねお）さんに指導いただき稲作や麦作りをしています

2010年

中屋敷フィールドの果樹園

草を刈り、きれいに手入れをすることで、プラムやモモなどの果樹が勢いを回復しました

マップ紹介

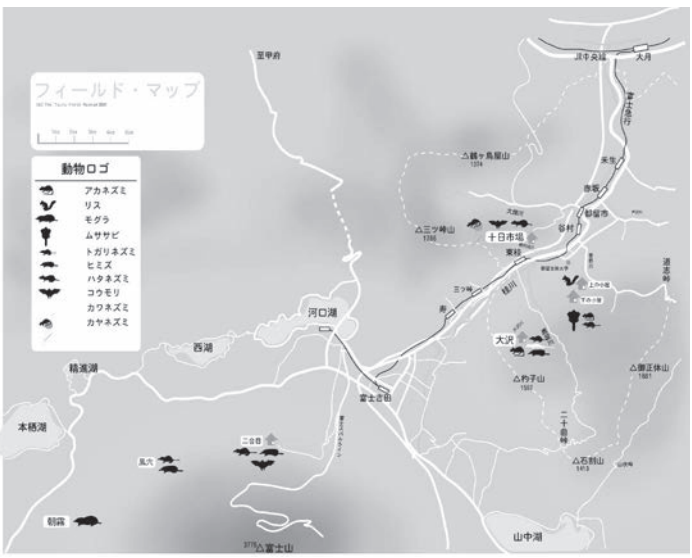
『フィールド・ノート』では「都留いきものマップ」のほかにもマップを作成しています。自分たちの見て、聞いて、感じた経験はマップにもたくさんつまっています。

お求めの方は編集部までご連絡ください。

フィールド・ノートマップ
/2009

FIELD・NOTE マップ
/2008

フィールド・ノートマップ
/2010



フィールド・マップ /2002　創刊号

田原（文学の小径）

木のあたり（白矢印）がテニスコートになりました。田の面積も減り、大きく育っていたクワも、今はなくなりました

楽山公園（広場）

アスレチックがなくなっています。今も変わらぬサクラの名所です

―― 歩いて、見て、聞いて、綴る

『フィールド・ノート』を続けて広がる世界

８周年を迎えて考える、『フィールド・ノート』を続けるたのしさ。続けていないと見えないものがあるのです。

『フィールド・ノート』編集部＝文・写真

都留での人の営みを書き留めていくこと

高尾町の商店街を歩いていたとき、以前本誌22号で取り上げていた「藍と器」に寄りました。何度もこのお店の前を通ったことがあって気になっていたのです。出てきたのは羽田綾女（はだあやめ）さん（63）。

気がつくと、綾女さんの子供時代の話になっています。綾女さんも小さいころに「したたはけ」（本誌66号参照）に遊びに行っていたこと、水着がなかったので毛糸で水着をつくってもらったこと、隣りの映画館から聞こえてくる音を子守唄のように聞いて子ども時代を送ったという話も聞かせていただきました。谷村で子ども時代を過ごしたかたで、この年代の女性にお話を聞くのは初めてだったので、ついつい聞き入ってしまいました。

私が『フィールド・ノート』の編集に携わるようになって6年のあいだ、都留のあちこちを歩いてお話を聞き、それを綴る、ということを繰り返してきました。その過程で、さまざまなかたとの交流の輪が広がっていくという確かな手応えを得ることもできました。

８年のあいだに、お話を聞かせてもらったかたのなかには亡くなられたり、お店を閉じられたりしたかたもいらっしゃいます。変わりゆくなかで、変わらない、都留での日々をもう少し書き留めていけたらと思います。

（桜井明子）

現在の「藍と器」（10.12.01）

自然と街が織りなすフィールド

大桑山の東側、ちょうど「都留自然遊歩道」のある尾根上には、アカマツが生えています。僕が十日市場で渡邊宗男（わたなべむねお）さん（80）にお話を伺っているとき、ふと大桑山の古道の話になりました。そのなかで、このアカマツのことを話題に出すとおもしろい答えが返ってきました。

渡邊さん曰く、今アカマツが生えているあたりは、昭和35年くらいまでは柴刈り場だったそうです（柴とはナラ類やクヌギなどをいい、柴刈りとはその頭を刈ることです）。刈った柴は田んぼに入れ、肥料にしたといいます。アカマツは柴、つまり肥料には向かないため、刈る人はいなかったそうです。その結果、柴刈りはアカマツの生長を助け、50年近くの月日をかさねて現在も大桑山にあるのです。

現在、このアカマツには、リスやムササビが来て、その球果（松ぼっくり）の種子を食べるなどしています。運が良ければ、樹上を移動する姿を見ることもできます。けれど、アカマツの立ち枯れが進んでいるのも事実です。ここの風景も、新しく移り変わっていくのでしょう。

人の暮らしと自然とは、ふとしたところでつながっていることがあります。自然と街とを行き来しているうちに、ぼんやりと見えてくるつながり。僕は今そこに、おもしろさを感じています。その一端を、これからも書くことをとおして、人に伝えていければと思います。

（西丸尭宏）

枯れたアカマツの立ち木から、種子が落ちたのか、また新たなアカマツの芽が出ていた（10.10.14）

雪上のノウサギの足跡

8周年、これから

地域のかたや読者のかた、さまざまなかたのあたたかな声が『フィールド・ノート』の8年という月日を支えてくださいました。これからも「歩き、見て、聞く」という基本を忘れずに、目の前の1号1号にしっかりと向き合っていきたいと思います。今後とも、よろしくお願いいたします。
新しい一年が幸多きものとなりますように。

編集部では、皆様からの声をお待ちしております。どうぞ気軽に手紙・メールをお寄せください。
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学地域交流研究センター　『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

小さな図書館

今から数十年前、山梨県のあちこちに小さな図書館がつくられました。「地域の子どもたちに読書の楽しさを知ってもらいたい」。そんな気持ちから自宅の一部を開放して作られた「文庫」や「一坪図書館」。子どもたちの笑顔が集まるこの場所も、今だんだんと数が減ってきています。2010年の12月、31年半の歴史に幕を下ろす、甲府市の「高源寺文庫」を訪ねました。

斎藤さんとそのお孫さん

私が訪れたのは12月1日、水曜日の夕方。「高源寺文庫」の最後の開館日である。甲府駅に近い県立図書館から50分ほど歩いたところに高源寺はある。門をくぐって、右手に伸びる飛び石の道を進むと本堂の横に「高原寺文庫」が姿をあらわすのだ。広さ6畳ほどのスペースの壁にそって並べられた本棚には四千冊近い本がびっしりとつまっている。これらの本を管理しているのが住職の斎藤洋子さん（66）。明るく、にこやかな表情がとっても似合う人だ。

文庫の歴史

高源寺文庫が誕生したのは、昭和54（1979）年5月9日のこと。それ以来、31年半の長きにわたって毎週水曜日の午後に開館した。まわりに田んぼしかなかった時代。しかも、近くの小学校は出来たばかりで設備が整っていなかった。公立図書館も遠く、高源寺文庫は学校帰りの子どもたちで溢れていたという。

私がお邪魔しているあいだにもたくさんの子どもとお母さんたちが文庫を訪れていた。

「この人たちは二世なの」

斎藤さんはさらりと口にする。今、子どもを連れてきているお母さんの多くはこの文庫の本を読んで育った。「やっぱりなくなるのは寂しい」。お母さん方は口々にそうつぶやく。高源寺文庫は、お母さんたちの憩いの場としても大きな役割を果たしていた。

A：高源寺の門。境内の木には名前のプレートがついている
B：高源寺文庫の外観。サッシ戸が入り口。そこから靴を脱いであがる
C：文庫に来ていた兄妹。最近、お兄ちゃんは文庫のなかにマンガがあることを発見したとか
D：お母さんの読み聞かせを、真剣に子どもたちが聞いている。お母さんと家のあいだにあるのは「はらぺこあおむし」の紙芝居
E：3歳の男の子。一緒に写っているのは、みんなの落書きが描かれた紙でできた家。なんと、4代目だという
F：「文庫だより」（号外）102号目。内容は、甲府市立図書館で12月21日～26日まで行われた「高源寺文庫　思い出展覧会」についてのお知らせ

A

B

C

D

E

高源寺文庫だより
高源寺文庫　思い出展覧会
日時：平成22年12月21日（火）～26（日）
場所：甲府市立図書館　展示室
ありがとう
お世話になりました
31年続いた高源寺文庫は平成22年12月1日で終わりとなりました。…… その間文庫に通ってくれた皆さん、文庫に協力して下さった、皆さんとの　たくさんの、思い出を展示します。どうぞお出かけください。
子どもたちもさそってきてください
甲府市立図書館 甲府市城東1-12-33 電話：055-235-1427
F

檀家さんとの約束

毎年、「読書週間」や「文庫祭り（高源寺で開催する祭り）」など、イベントのお知らせとして発行している「文庫だより」も号外を含め１０２号となった。文庫を始める時、ある檀家さんが協力を買って出て、現在まで「文庫だより」を描き続けてくれた。「１００号になる頃には（その檀家さんは）だいたい90歳になる。その時には閉館のことを考えよう」。当時50代後半だった檀家さんと文庫を開館した時から決めていたことだったという。始まりがあれば、必ず終わりが来る。斎藤さんにとっても、檀家さんやお母さん方にとっても、日常の一部がなくなることは、まさに心にぽっかりと穴が空くような、そんな感覚なのだろう。

文庫と人

長い歴史のなかで、高源寺文庫にかかわった人はどれだけいたのだろう。斎藤さんとともに活動してきた檀家さんや運営のボランティアを行ってくれた近所の人、そして何より、文庫を必要とし利用していた子どもたち。数え切れないほどの人に支えられ、必要とされて今まで続くことができた高源寺文庫。私がかかわったのは最後の一回だったけど、ここで見た子どもたちの笑顔を思い出として心に残しておこうと思った。

岩下瑞枝（社会学科3年）＝文・写真

馬と人との暮らし

写真は渡邊さんではないが、馬と人びとがともに
暮らしていた様子がうかがえる

本学の講義や『フィールド・ノート』編集室の会話のなかで馬についての話を聞くことが何度かありました。現在本学がある場所が競馬場だったことや、このあたりに馬に関わる仕事があったこと。暮らしのなかで馬と人はどのように関わっていたのでしょう。

11月7日、十日市場に住む渡邊宗男（わたなべむねお）さん（80）に、馬についてのお話を伺いました。渡邊さんは昭和35、36年頃まで、馬を飼っていたそうです。今から50年くらい前になります。

当時の馬一頭の値段は四〜五十万円。十日市場には多いときで馬が30頭、乳牛が3頭いたそうで、ほぼ一家に一頭馬がいたというのには驚きました。また、獣医さんや、かなぐつ屋（装蹄の仕事）もあったそうです。

今では特定の場所でしか馬を見ることはできません。馬に関する知識を持つ人はごく一部しかいませんし、触ったことがあるという人もなかなかいないでしょう。

馬について渡邊さんは「生活の一部だよぉ」と当然のように答えます。馬が生活の一部というのは、馬に関わるお仕事をしているかた以外、想像もつかないかもしれません。

私は高校生の時に馬術部で、毎日馬の世話をしていたこともあり、馬が生活の一部というのはなんとなくわかるような気がします。しかし、宗男さんがいう「生活の一部」とは少し異なると感じました。「堆肥をこしらえるにも馬の馬糞がいるし、畑や田を耕すにも馬が必要だった」。今のように化学肥料がなかったので馬糞を堆肥として使ったそうです。そうすると土が柔らかくなり畑が肥えたとか。また、耕運機やトラクターがなかったので、農作業をするうえで馬は田畑を耕す重要な役割を果たしていたようです。競馬上がりの馬を農耕馬として使うこともあったといいます。

馬の世話に関して、渡邊さんは「生きものを飼うってことほど大変なこと

はないだよ」と語ります。馬のえさになるススキは毎日、尾崎山、天狗山、大桑山に取りに行き、馬の背につけて運んだとのことでした。夏には子どもたちが馬に乗って川へ行き、みんなそこで馬を洗ったそうです。馬のしっぽにつかまって坂をのぼったこともあるといいます。蹴られたこともあるとか。怖いし、痛そうです。また、渡邊さんは馬を働かせた後に自分が馬に乗って家に帰ったら怒られた、ということが2回ほどあったといいます。「一日馬を使ってなんで乗ってくるだ、引いてこう」と。馬をいたわるこの言葉がとても微笑ましく感じ、人と馬の共存している情景がぼんやりと頭のなかに浮かんだような気がしました。馬がいるから人は生活ができ、人がいるから馬は生きることができる、そういう感覚なのでしょう。

「うちの馬はずうずうしくてよぉ」渡邊さんの飼っていた馬は子どもが乗るということをきかなかったそうです。人を見て馬鹿にすることがあるので、仕事をするときは馬鹿にされない人を選んでおこなったといいます。

馬は人の気持ちを察知しやすい動物だと聞いたことがあります。そういえば馬術の競技の時、乗る人が緊張して固くなっているとそれが馬にも伝わると顧問の先生に言われたことがあります。馬は大きいので近寄りがたいイメージがあるかもしれませんが、繊細な生きものなのです。

「だんだん耕運機がトラクターになって馬や牛がいらなくなった」

時代の流れとともに人々は馬を飼うことを辞めていきました。大変な思いをして馬を飼う必要がなくなったのです。そして、馬と人との距離は遠くなっていきました。渡邊さんの家も飼っていた馬を売ったそうです。今まで一緒に生活してきた馬を手放すのは悲しくなかったですか、と聞くと笑いながら悲しくなんてなかった、世話をするのが大変だったからとおっしゃっていました。

写真のように馬に乗ることを「はなどり」という。田をおこしているところ

スーパーがあって、大学がある。道には車が通って学生が歩いている。それが今の都留で、私の目に映るものがすべてなのだと錯覚していました。けれど、馬が道を歩いている、人を乗せて走っている。そんな当たり前の日常が確かにあったのです。

今回渡邊さんが語ってくれた馬と人のお話と、私が築いた馬との関係はどちらも馬と人の関わりなのに、何かが違うと感じたのはどうしてでしょう。それはきっと、馬との密着度の違いなのかもしれません。馬の世話をするというよりも、馬とともに暮らす日常。一緒に働いて一緒に休む。馬は家族のような存在で一緒にいるのが当たり前だったのだと思います。そしてそのような生活のなかで人々が身につけてきた知恵や自然との関わりの一部を知ることができました。馬とともに畑を耕すこと。ススキを山に採りに行くことや、馬糞を肥料として使うこと。渡邊さんの自然とのつき合い方にはこうした馬との暮らしのなかから身につけたことがたくさんある、と強く感じました。

馬を休ませているところ。
昔はわらの上に座布団を敷いて乗ったそう

藤森美紀（社会学科2年）＝文
本学フィールド・ミュージアム部門＝写真提供

あったかい場所
―泰安温泉―

富士急行線 谷村町駅から4分ほど歩いたところに、一軒の銭湯がある。百年近い歴史をもつ老舗、泰安温泉だ。ここでは銭湯を経営するかたわら、2階に学生向けの下宿アパートも営んでいる。少し変わったお風呂屋さんだな、という印象をもっていた私は、ぜひお話を聞きたいと思い泰安温泉を訪ねることにした。

泰安温泉の外観　2010年10月29日撮影

朝夕肌寒くなり始めた10月末、都留市谷村に店を構える泰安温泉を訪ねた。店内には多くのお客さんが来店し、とてもにぎやかな雰囲気がただよっていた。

お話をうかがったのは古屋雄子さん(68)。忙しい月末にもかかわらず快くお話ししてくださった。古屋さんは都留市出身で、この銭湯に嫁いで46年になる。長年ご家族と一緒にお店を切り盛りしてきた。そのあいだに銭湯を取りまく状況はだいぶ変わってきているようだ。

古屋さんがお嫁に来たころ、都留市内には泰安温泉（当時は泰安湯）を含め4軒の銭湯が営業していた。お風呂がまだ一般家庭に普及しておらず、近所の人たちは街の銭湯を利用することが多かった。通ってくる学生も大勢いて、毎日とても忙しかったそうだ。現在ではほとんどの家庭にお風呂が普及し、昔ながらの銭湯は泰安温泉だけになってしまった。

◇

銭湯を経営していて一番大変なことは何ですか？ という質問に「とにかく休みがないことね」と答える古屋さん。銭湯は休みが少ない仕事なのだという。定休日は毎月第一・三月曜日の二日だけだ。

「具合が悪くても休んでられないから、病院に行きながらでもお店を開けなきゃ。臨時休業なんてボイラーの調子が悪いときでもなければありませんよ」。毎日の忙しさを語るなかに、どこか力強さを感じるお話だった。

泰安温泉には毎日いろいろなお客さんが入浴にやって来る。農作業や雪かきの後に体を温めに来るお年寄り、仕事帰りに汗を流していく勤め人。部活帰りの学生は、大きなお風呂のほうが疲れも取れるからといって通ってくるそうだ。また、上野原市や大月市など都留市外からのお客さんも多い。古屋さんの「休んでいられない」というお話の裏には、こうして毎日のように通ってきてくれる「常連さん」の存在があるのだろう。

「どのお風呂に行くより、ここが落ち着く。そう言ってもらえる時が一番嬉しいですね」。

一回限りではなく頻繁に訪れるお客さんが多いからこそ、古屋さんは「できることは何でもする」という気配りを大切にしてきた。それは顔なじみだからといって欠かすことのな

開店直前の浴場
暖かい湯気につつまれていた

お客さんと談笑する古屋雄子さん（右）。この日も朝早くからたくさんのお客さんが来店していた

い、お客さんへの真摯な態度なのだと思う。泰安温泉に広がる人の繋がりは、きっとこうした気配りに支えられながら生まれてくるのだろう。

◇

下宿アパートを始めたのは30年くらい前のこと。ほかの銭湯は2階に喫茶店などを増設して経営を始めていた。だが喫茶店などは維持していくにもかなりの費用がかかってしまう。そこで、都留には学生が多く集まることを考え、下宿用の部屋を作ることにした。七畳半から八畳の広々とした部屋は当時とても珍しく、銭湯にはいつでも入れるということで人気を集めた。現在は9部屋を貸していて、いまだに空きができたことがないという。

「みんなとっても仲がいいですよ。いまそういうところ、少ないんじゃないの」と古屋さん。同じ学年はもちろん、先輩が後輩の面倒を見る思いやりの関係が長年に渡って続いてきている。引越しともなれば総出で荷物運びを手伝ってくれるという。今年の春も、進んで作業を手伝ってくれた上級生の姿に、古屋さんは心を動かされたと話す。

「毎日会うから家族も同じね。できることは何でもしてあげてますよ」。ここにも古屋さんの気配りが活きている。いつも常連さんを大切にしているように、学生を家族のように思って気にかけているのだ。「できることは何でもしてあげたい」という思いからは、古屋さんの人柄が伝わってくるようだ。でも余計な干渉はしない。そっと見守り、それとなく声をかけることも学生への気配りのひとつなのだろう。

そうして古屋さんと学生との関係は、大学卒業後もずっと続いていく。もう何年も行き会わないけれど、手紙や年賀状のやり取りが続いている。なかには遠いところから会いに来てくれる人もいるそうだ。

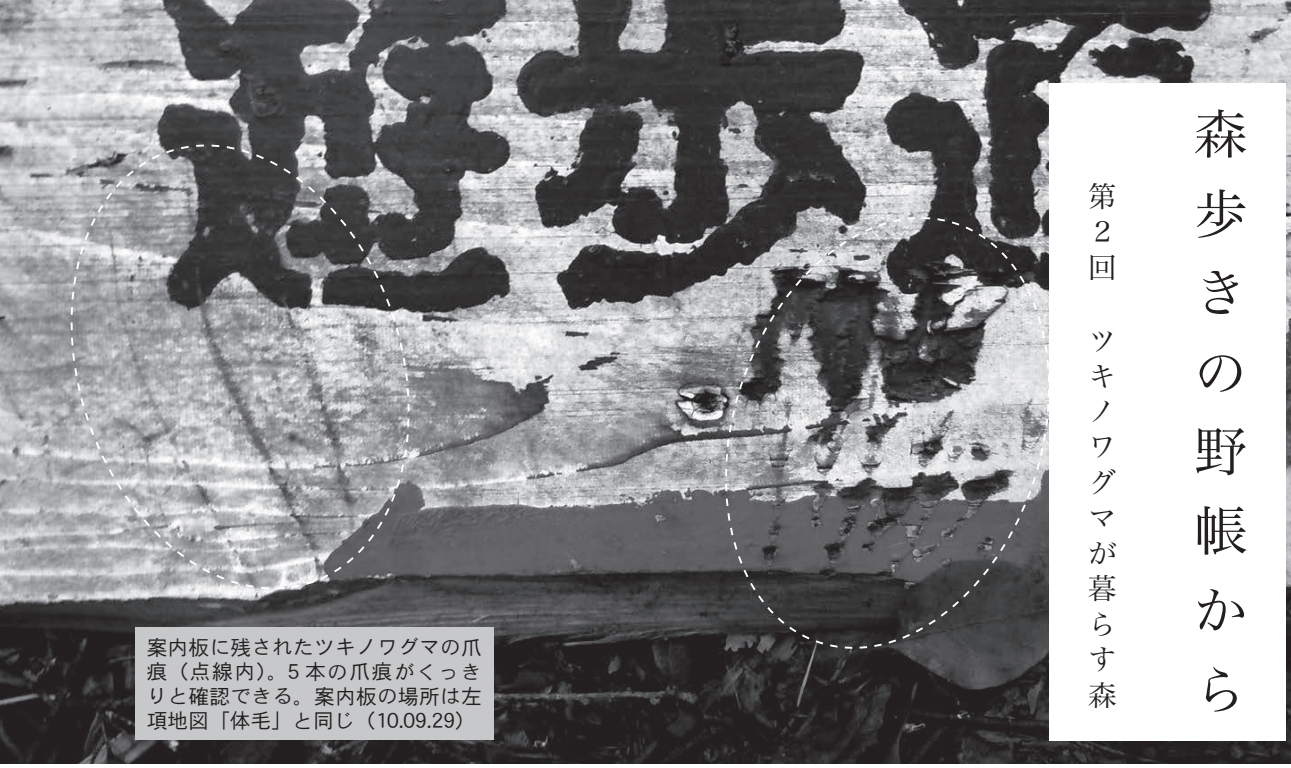
再会のときは結婚の報告や、子どもの誕生といったためでたい知らせがお土産ということも。一緒に嬉しいことや喜ばしいこと、ときには不安な気持ちも分かち合う関係は、ほんとうに家族のようだ。

＊　＊　＊

泰安温泉は地域の人たちにとっては憩いの場所であり、学生にとっては帰る場所、帰る家でもある。きっとここには古屋さんが大切にしている思いや、たくさんの人の繋がりが折り重なっている。そこからは温もりが生まれ、泰安温泉がとてもあったかい場所になっているような気がした。

下宿のようす
共同のトイレや洗濯機も同じ２階にある

牛丸景太（国文学科1年）＝文・写真



森歩きの野帳から

第2回　ツキノワグマが暮らす森

案内板に残されたツキノワグマの爪痕（点線内）。5本の爪痕がくっきりと確認できる。案内板の場所は左項地図「体毛」と同じ（10.09.29）

今年の4月21日から、毎週「都留自然遊歩道」（以下、森と表記）を歩いている。元坂の馬頭観音から入り、大桑まで歩く（8月27日から。それ以前は楽山公園までだった）。ひとつの場所にかようことを通して感じたことを、3回にわたってお伝えしたい。

気配を感じて立ち止まる。茂みや樹上、樹木の陰……。あらゆる物音に耳を澄まし、動物の気配をさがす。「怖さ」を感じたら、速やかに立ち去る。出会いをたのしめそうなら、息を潜めて物陰へ。

森で聞こえる音は、痕跡と違って、今そこの現状を教えてくれる。この「気配」を知るのは出会いのためであり、ときには出会いを避けるためでもあるのだ。

気配は「なんとなくいる」という曖昧な感覚で、じっさいに出会うこともあれば、そうならないこともある。動物の気配を感じながら歩けると、森歩きはよりたのしくなる。

8月27日。森歩きで、初めて大桑まで歩いた。以前から大桑へと続く道に、動物の濃い気配を感じていたのだ。

じっさいに歩くと、遊歩道ではなく古道のよう。道は途切れたり、分かれていたり。迷いながら歩いていると、足元に大きな糞を見つけた。

自分の手のひらよりも大きな糞。温かくはないが、じっとりと湿っていてまだ新しい。棒きれで糞の中身を確認すると、植物の葉が黄土色に変色してぎっしりと詰まっていた。近くには扁平の足跡があり、縦幅はおよそ12㎝。不明瞭ながら指の跡も見てとれる。

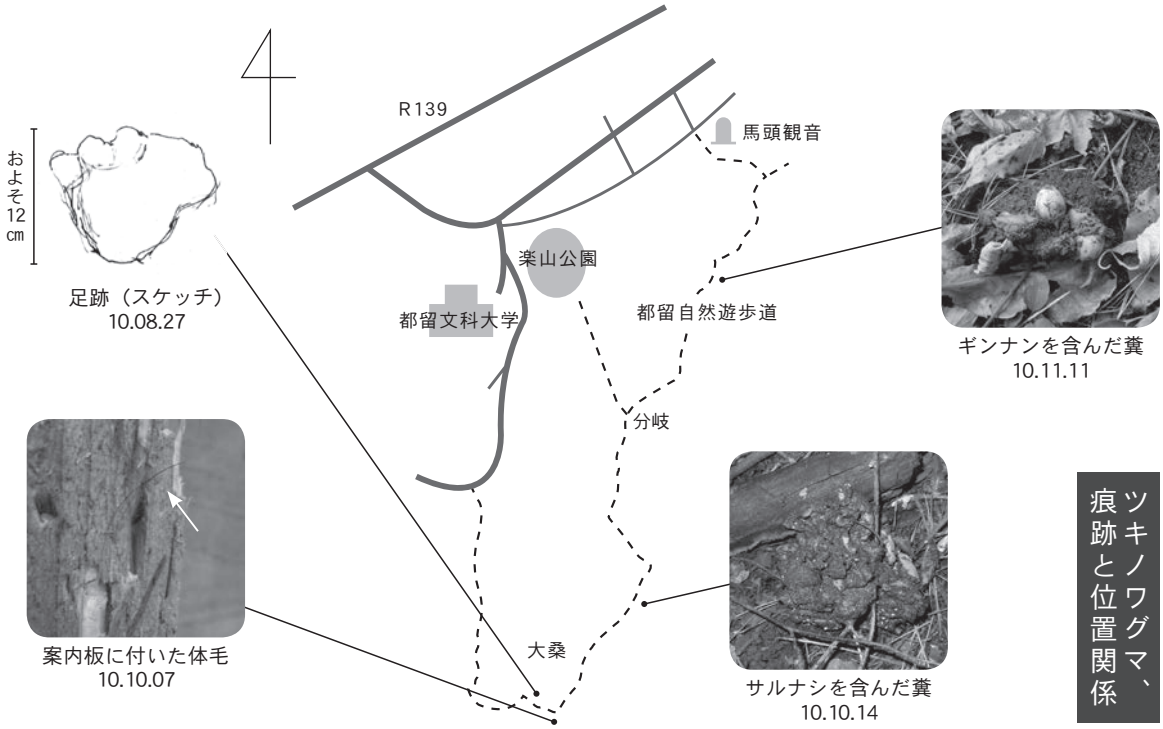
直感的に、ツキノワグマの糞だと思った。

近くの樹上、倒木の影、茂みのなか……。思いつく、あらゆるところに目を凝らす。ピンと張り詰めた緊張感が、森全体を包む。姿は見えないが、クマの生々しい息づかいを感じた。つい数時間前まで、クマはここにいたのだろう。

追えば会えるかもしれない。同じ道を歩いていた「近さ」と、クマに対する「怖れ」が交差する。怖さを含んだ、妙なうれしさがこみ上げてきた。初めて感じる、不思議な感覚

ツキノワグマの糞 10.08.27
場所は地図「足跡（スケッチ）」と同じ
最長の部分を測ると、縦 16.5㎝、横 34㎝

ツキノワグマ、痕跡と位置関係



だった。

結局、クマを追うことはしなかった。この森でクマが暮らしている。その事実を目の当たりにできただけで十分だった。

身近な森とはいえ、そこは自然のなか。親しみを持ちつつも、歩み寄るのには一線があることを忘れてはいけない。

8月27日のツキノワグマとの一件以来、彼らと無意に出会わないよう鈴を付けて歩いている。それでも鈴をずっと付けて歩くと音が気になるので、彼らがいないだろうという場所では外して歩いている。そんな場所に限って、彼らの新しい糞を見つけてゾッとすることもしばしばだ。

こんなふうに森歩きをかさねるうち、僕のなかに少しずつ「慣れ」が生じてきているのを感じる。

11月11日。藪からのガサガサという音を気にも留めず、ガビチョウだと高を括って素通りしようとした。その瞬間、イノシシが目の前の道を猛スピードで横切ったのである。何かの拍子にイノシシを刺激していたら、突進されていたかもしれない。

ツキノワグマの行動圏にしても、イノシシとガビチョウの勘違いにしても、自身の経験のみに基づいて判断してしまっていた。

僕は森歩きに慣れるにつれ、生きものたちとの向き合い方が雑になっていたように思う。経験から培った知識に気を取られ、その場での観察を怠っていたのである。

経験は信頼できる指標ではあるけれど、「答え」ではない。その都度の観察と相まって、はじめて自分の糧となっていく。

出会いに対する「慣れ」への戒め。そして、つねに新鮮な観察者であること。ツキノワグマやイノシシとの出会いをとおして、森歩きをより深めていく術を学ぶことができたような気がした。

———

12月16日、「都留自然遊歩道」に初雪が舞った。朝の短いあいだのことで、雪は5㎜ほど積もって、お昼には融けてしまった。動物たちの足跡が顕著になる雪の季節。いったいどんな出会いが待っているのか。今から胸を躍らせている。

※山に入るさいはクマ鈴をつけるなどして、野生動物との距離の取り方に気をつけてください。

西丸尭宏（社会学科4年）＝文・写真

第11回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン　森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

アカマツの種子をくわえたコガラ

毎日、見ること

●文・写真　西教生（河口湖フィールドセンター　自然共生研究室）

『ウォールデン　森の生活』を読んでいると、文字を追う目の止まるところが何箇所かあります。たとえば、第1章のつぎの部分。

「私たちは、多くのことを知っているといっても、大部分は思い込みです。知るということは、私たちが人に聞き、書物で読んで想像で理解していた事実を、自分の経験で理解した事実にするという作業です」（第1章　経済　21頁）

文字を追う目が止まるのは、そこが自分にとってひときわ重要な箇所だからでしょう。私は、野外で生きものを観察して、彼らの暮らしを知っていきたいと思い、山を歩いています。彼らの暮らしを知るには、それを見ないといけません。「自分の経験で理解」するためには、毎日でも山に出かける必要があります。図鑑や専門書には、さまざまな生きものの生活史が記されており、それは大いに参考になるものの、疑問に思うすべてのことには答えてくれません。こんなとき、私たちが手にしている知識は、ほんとうにわずかであると認識するわけです。これは、どの学問分野にも共通のことではないでしょうか。

野外で生きものの観察をつづけると、いろんなことがわかってきます。目で見える出来事は把握しやすく、興味のある事柄はなおのこと深く理解できるものです。野外観察のいいところは、観察の対象になっているものはもちろんのこと、それを取り巻く環境にも関心が広がることです。多くの生きものは、ほかのさまざまなものと関係しながら生きているため、広く見ていかないといけません。

観察を上書き

動物を観察しているときによく思うのですが、その姿をずっと見せてくれるものはほとんどいません。ですから、断片的な観察になってしまいます。これでは生活の一部しか見えないため、彼らの暮らしの全体を知ることは困難です。もっと長い時間、観察を重ねる必要があります。

観察時間を増やす方法のひとつは、毎日、山に出かけることです。私は10月からほとんど毎日、鳥を見ることを心がけてきました。そこでわかったことはいくつかあったのです

が、重要なのは自分の経験で理解することでした。聞きかじった借り物の知識だけでは、いつまで経っても「知る」ことはできません。

毎日見るよさは、昨日の観察にきょうの出来事を上書きしていける点にあります。昨日とはちょっと違う、いや同じだ、といったイメージをもって歩けることは、全体を知る手がかりになります。それを積み重ねていくと、リアルタイムで動態を把握でき、後追いではない観察ができる。不思議に思った行動を注意深く観察し、その意味に迫ることも可能になります。毎日見に出かけると、「きょう」という時間は昨日の延長であるわけですから、週に1回とか、月に2回といった観察とはくらべものにならないほど多くのことが見えてきます。

アカマツの球果に止まるヒガラ

自分の目で確認する楽しさ

夏の終わりから早春に山を歩いていると、カラ類の混群に出会うことがあります。カラ類はシジュウカラやヤマガラ、ヒガラやコガラなどの鳥類のことで、混群はそれらが集まった群れを指します。時期や場所によって異なりますが、20羽前後の鳥類が集まって混群を作ります。混群で山を移動しながら食物を取っているのです。

カラ類が夏の終わりから混群を作ること、その群れの大まかなメンバー構成はこれまでの観察や文献から知ってはいました。しかし最近、カラ類の混群を集中して観察する機会があり、なるほど、これが「自分の経験で理解した事実にするという作業」なのかと思う場面がありました。

カラ類が食物を取るところを見ていると、多くの個体がアカマツの球果に止まり、そこをつついていました。いつものように虫を取っているのかと思っていると、球果から種子を取り出して食べています。初めて見る行動でした。虫を取っている個体もいるようでしたが、種子を取っているものがほとんどです。この観察例により、カラ類はアカマツの球果から虫や種子を取って食べますが、種子の場合は熟して、球果が開いているときしか利用できないことが明らかになりました。カラ類のこの行動を見たときは、ちょうどアカマツの種子の熟す時期でした。それ以前もカラ類を観察していましたが、球果よりも枝先や幹で食物を探していました。

知識として知っていることを、じっさいに野外で自分の目で確認する楽しさ。知ることは、楽しい。知ったところから、さらに新しい発見が生まれる。こうした作業をしていかないと、「思い込み」だけしか残りません。そのためには、毎日、歩きに出かける必要があるわけです。でも、毎日山を歩いても、知り尽くせない世界があります。それは、私たちの身近なところにあり、思いのほか深遠だからこそ心惹かれ、繰り返し出かけるのだと思います。

自然の息吹を伝える水の流れ

●文・写真　北垣憲二（本誌発行人）

木々の葉がすっかり落ち、森が明るくなると私は冬の訪れを感じます。大沢でも岸辺に日が差し込み、岩のコケが鮮やかに照らし出されます。

秋も終わりに近づくと、落ち葉が上流の自然のようすを確かに伝えてくれます。川にはさまざまな落ち葉が流れてくるようになりました。ミズナラの葉などは源流付近の標高の高い場所から流れてきたのでしょう。落ち葉だけではありません。秋に熟したアケビやクリの実なども流れてきます。まさに川はさまざまなものが流れ込む栄養豊かな場所であると、はっきりと実感できます。さらに流れてくるものを注意して見ていると、たとえば上流にはどんな植物が生えているかも想像できます。川は上流の自然の動向をも伝えてくれます。

川にたまった落ち葉

中屋敷の散歩でも大沢と同じような経験をしました。中屋敷では、２００６年に地主の渡邊宗男（わたなべむねお）さん（80）と湧水地から観察小屋までパイプで水を引きました。湧水地まで中屋敷の観察小屋から１２０ｍほど離れています。そのあいだを直径20㎜のパイプでつなぎました。湧水地からパイプを通って流れ出る水は観察小屋の前で池となりました。永遠に流れ出るかのようなこの水は、コオイムシやミズカマキリ、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエルなど多くの生きものを育むまでになりました。

パイプが長いだけに手入れが欠かせません。湧水地と観察小屋の高低差もわずかしかないため、パイプに石や落ち葉が詰まるとすぐに水は止まります。中屋敷では湧水地の見回りが散歩の日課の一つとなりました。

11月12日、小屋前のパイプから出てくる水が濁っていることに気づきました。このようなことはこれまでありません。そのため私には、どうして水が濁っているのかまったく想像できませんでした。すぐに湧水地に出かけることにしました。近づくと、体長60㎝ほどの動物が歩いています。さらに近づくと脚と尾が短いことなどからイノシシとわかりました。イノシシは私の姿を警戒するようすもなく一定のリズムを刻んでゆっくりとこちらに

近づいてきます。怖さはまったく感じません。じっとしていると、私のそばを何事もなかったかのように通り過ぎていきます。湧水地を調べてみると、たしかに今ここにいたイノシシが石を掘り返した痕があります。あたりには偶蹄目の二本の爪痕がいたるところに残っていました。

中屋敷には２０００年から通いはじめ、これまでもイノシシの糞やクズの根を掘ったと思われる痕、刈り取り前の稲を食べた痕などを見てきました。姿を見かけたこともあります。しかしそれも一瞬にすぎません。今回のように間近で遭遇したのはこれが初めてです。

中屋敷で長年、畑作をしてこられた清水貞一さん（87）は、１９９０年ころまでイノシシの姿はもとより、足跡や地面を掘った痕などまったく見なかったといいます。渡邊宗男さんも２０００年ころからここにイノシシが現れ始め、今ではクズの根だけでなく石の下のサワガニを食べることもあるといいます。

私のそばを通り過ぎるイノシシ

最近では、ニホンジカも中屋敷で確認されるようになりました。２０００年ころまでにはなかったことです。中屋敷で私たちは稲作や麦作もしていますが、それはただ農作業を体験しようというだけではなく、イノシシやニホンジカといった大型獣とどのように共生していけばよいかという問題も畑作を通して現場で考えてみたかったからです。これはいま全国の里地・里山の現代的な課題の一つといえるでしょう。

イノシシとの遭遇後、私は観察小屋の水の出口に小さな透明のコップを置き、そこに湧水池からの水を注ぐことにしました。こうしておくと、水が濁ったときにはコップの底に泥が溜まります。注意してコップを観察してみると、11月12日以降、これまで3度、コップの底に泥がたまりました。すべてがイノシシによるものなのかはわかりません。しかしイノシシの暮らしの一端はこのパイプから出る泥を手がかりに知ることができるかもしれません。

パイプを伝ってこんこんと流れ出る水

こうしたイノシシとの遭遇があってから、以前、本学附属図書館のビオトープの池に尾崎山からパイプを通して水を引く計画があったことを思い出しました。附属図書館からその水源まで直線距離で約1㎞。森のなかの湧水と大学の池とをつなぐそのパイプから出る水は、キャンパスから離れた森の自然の息吹や動向をも確かに知らせてくれるはず。それは私たちの感覚を鍛え、やがて自然との出会いをたのしみに私たちを森へといざなうことでしょう。今回のイノシシとの出会いは、私たちが夢みた計画の実現をしっかりと後押ししてくれる経験となりました。

山梨をゆく

2010年9月11日、都留を出発して、市川三郷町を目指しました。道の途中ではありますが甲府市まで歩き抜きました。

ことのはじまりは、香川県出身・市太の一言でした。「都留から甲府まで行こうとしたんだ。でも途中で断念したから、いつかリベンジを果たしたい」。山梨県にある市川三郷町の出身の石川は、都留から実家までの距離を自動車で通ったことはあったけれど、歩いたことはありませんでした。

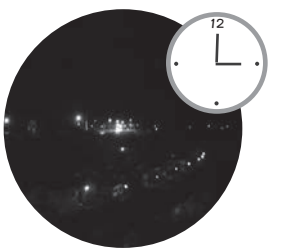
せっかくだから、2人で甲府よりも向こう側にある石川家を目的にしてみよう。出身の違う2人が、山の連なる山梨県を歩きました。

石川あすか（社会学科3年）＝文・写真
市太佐知（国文学科3年）＝文

出発！

Tsuru

深夜の都留文科大学前駅を出発した。



Otsuki

夜の大月。橋の上から撮影。並んだ街灯が不思議な光景に映る。

Sasago

長さ 2,953 mの新笹子トンネルに挑む。

大月からの登り道 ——市太佐知

今回歩いた道は、ほとんどが山のあいだをぬう坂道だ。私の出身地は、おむすび型の小さな山がポツン、ポツンとあるばかりの平坦なところ。そのせいか、今回の道を目の前にしたとき、坂の多さと急さにたじろいだ。

大月から新笹子トンネルに至るまでの登り坂は、途切れることなく続く。以前、私が地元の平坦な道と同じように自転車を漕ごうとして、目的地に向かうことをあきらめた坂道だ。足を動かさないと目的地には近づかないと自分たちを奮い立たせて進む。進路が隠れるほど曲がりくねった道。まだ周囲が暗かったこともかさなって、振り返っても、歩いてきた道を頭に浮かべることができない。

しだいに背後から朝日が差し込み、少し周辺の景色が見えるようになってきた。すると自分たちの歩いている坂がどのように登り曲がっているのかが分かってきた。地図で見ていた平面的な現在地が、頭のなかで立体的にイメージできる。長距離を歩いてきたからこそ掴めた感覚だった。

笹子トンネルで見えたつながり

――石川あすか

朝焼けをみてから2時間がたったころ、新笹子トンネルの手前まで到着した。自動車では通ったことがあるけれど、なかなか出口が見えなくて、長いと感じるトンネルだ。心して挑む。オレンジ色の灯りに横切るトラックの起こす風。約3㎞のトンネルをふらふらしながら歩き抜いた。

トンネルを抜けると、山の向こうが少し開けた。あいだからは、うっすらと青くかすんだ町並みが見える。

「甲府盆地がみえた！」

幼い頃から身近な存在だった、甲府盆地の遠景。この場所も何度か通ったことがあったけれど、感動したのはこのときが初めてだった。目の前の光景に、実家からみていた景色が重なる。都留と甲府盆地、そして甲府盆地を見渡せる私の実家。この3つは本当につながっていたのだ。長いトンネルをふらふらと歩いて、初めてやってきた感覚だった。

Kohu

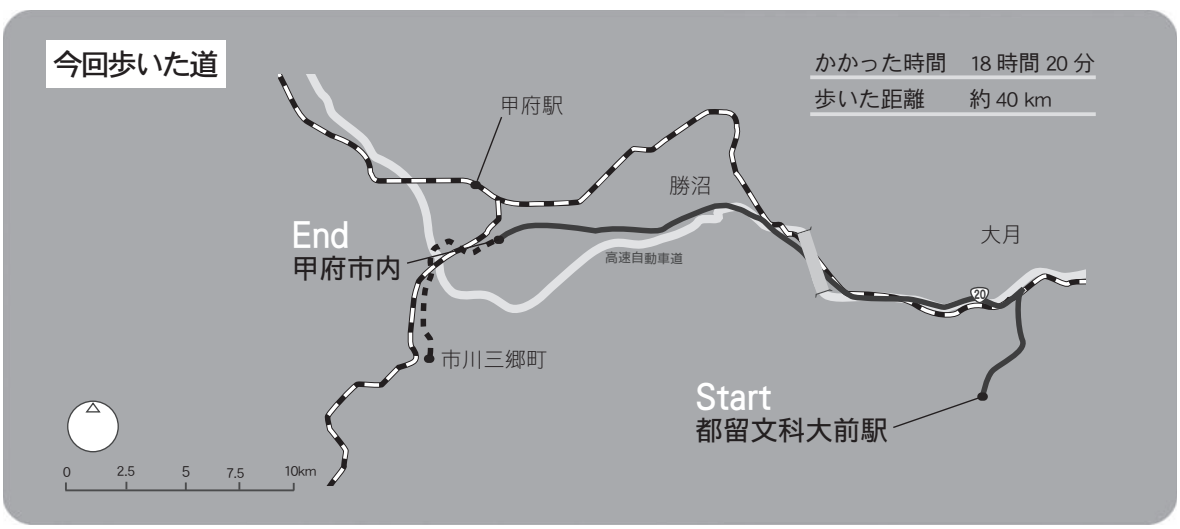
目的地までは行けなかったけれど、ここまで歩きました。

Koshu H.w

甲州街道を歩いた。３～４時間ほどしりとりをしていた。

bonchi

山のあいまが甲府盆地。視界がひらけて遠くから望めた。



山あり谷あり。フルマラソン（42．195㎞）とほぼ同じ距離を歩いてみたら、それぞれの感想は、育った地形に則していました。

――まず、歩いてみての感想は？

市太：はじめの目的地にはたどり着けなかったけれど、私たち甲府まで行けたんだね。前にひとりで行こうとしたことがあったんだけど、途中で諦めてしまった。だから、自分の力だけで甲府まで行けたっていうのがほんとにすごい。

石川：今回歩いた道を車で通ったことはあったけれど、道が繋がっているっていう実感がもてなかった。実家は実家で、今住んでる都留は都留。なんとなく遠い存在だったというか。でもトンネルを歩いていって、「あ、甲府盆地が見えた！」、つながってたんだって初めて実感がわいたというか。

市太：意識のなかでつながった……？

石川：そう、道ってつながってるんだっていう実感がもてた。

市太：なんかわかる！　あたり前のことなんだけど、自分でずっと全部たどっていったから、確実につながってたんだっていう実感。あと、途中で攘夷志士たちの碑があったから、昔の人たちが馬で通ったのかな、歩いてきたのかなって思うのもけっこう楽しかった。

――山梨はどうだった？

市太：大月から、どこまで登っても登り坂なところに驚いた。坂道が無くて当たり前の場所に住んでたから。地元は平野で、高低差を考えずに地図をみる癖がついていた。そうやってひとりで考えて自転車で行こうとして、結局断念した。

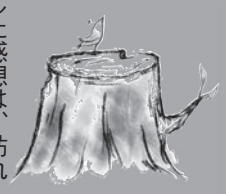
石川：へぇ！　私は坂があるのが当たり前だったからな。歩き疲れてやっと坂を意識したかも。勝沼で上りと下りの坂が繰り返し歩いたとき、あぁ、坂がつらいって。

市太：勝沼まで意識しなかっただなんて！　私は都留市内からずっと坂を歩いている気でいたよ。道中、2人の疲れるポイントが違ったよね。坂の感覚が違ったからなのかも。でも1人だったら絶対、甲府すら行かずに諦めてました。

石川：私もです。最初の目的地にしていた私の実家なんて、考えられなかったかも。

おわりに

―市太佐知



今回の行程で2人に共通した感想は、訪れた場所の一つひとつが点から線へとつながっていく感覚と、都留から甲府まで歩いたという大きな達成感だ。とにかく疲れたけれど、同じ道のりをお互い1人きりでは歩き抜けなかった。

そんなふうに一緒に歩いた道なのに、2人の感じ方は全く異なっていた。私が急な坂を登ったつもりでいても、石川さんはその坂を平坦な道を歩くように進む。お互いが育った土地の環境の違いが、坂道をきっかけにこんなに現れるとは思いもしなかった。

今回、じっさいに長い道のりを歩いて、道がつながっているという常識的なことをあらためて実感した。そして、2人で歩くことで、お互いの「視点」を分かち合うことができたように思う。

歩くことをとおして、当たり前のことを自分で確かめてみる大切さや、人と経験をともにするたのしさに気づけたことが、何よりの成果だった。

ムササビライブカメラ奮闘記

都留の森にはムササビが住んでいます。しかし、ムササビの生態についてはまだわからないところが多くあります。そこで、ムササビの巣箱にライブカメラを取り付けて、生活のようすを観察しようという試みが今年度から都留文科大学の地域交流研究センターと情報センターでおこなわれています。それが「ムササビライブカメラプロジェクト」です。

「ムササビライブカメラプロジェクト」はトラブルも多く、その運用は一筋縄ではいかなかった。巣箱は森のなかの木の上に設置してあるのだが、この森のなかというのは湿度が高い。夏場は汗がまったく乾かないほどの湿気なのだ。外で運用するためにカメラは防水仕様になっているが、湿気は防ぎきれない。そのため、湿気でカメラの無線装置が腐食してしまい故障してしまったことがある。現在ではカメラの故障を防ぐために月に一度、日が沈んだあと木にのぼり（ムササビは日没後に出巣するため）、巣箱のなかに設置したカメラのメンテナンスをおこなっている。それでも、突発的なトラブルには対処が難しいのが現状だ。

たとえば、突然カメラの映像がとぎれてしまうことがある。ネットワーク上のトラブル、電波が弱くなる、ケーブルが抜けているなどさまざまな原因があるが、11 月にはなんと電源ケーブルが切れていた。

カメラを動かすには電力が必要になるため、電源ケーブルを森のなかに伸ばして動かしている。それが切れていたのだ。原因は特定できていないが、今後このようなことが起こらないように電源ケーブルをゴムのチューブで覆い、簡単には切れないような対策をおこなった。

今年度からは学生食堂と自然科学棟、そして大学のウェブページ上で巣箱のなかのようすを見ることができるようになった。ノートやコメント欄も用意しているので、気軽にムササビを観察して生活のようすを書きこんで頂ければ幸いである。今後も、誰でもムササビを観察ができるような環境づくりのために努力と工夫を重ねていきたいと思う。

寸断された配線

■都留文科大学ムササビライブカメラ
（http://www.tsuru.ac.jp/open/musasabi/musasabi01.html）

● 志村夏樹（地域交流研究センター職員）＝文・写真

桑山大だより
OHKUWAYAMA NEWS LETTER

うら山図鑑　第９弾
「鳥類」

鳥類（鳥のなかま）は、空に進出した脊椎動物（背骨のある動物）で、今から１億5000万年ぐらい前に爬虫類（恐竜）のなかまから進化したと考えられています。あごをくちばしにするなど、体を軽くする工夫をいろいろしています。空を飛ぶことができるので、季節に合わせて国を越えて旅をする種類もたくさんいます。世界には約10000種類いて、日本には約550種類、そのうち山梨には約230種類で、都留市には約100種類います。

都留市で見られるおもな鳥を、大きく次の４つにわけて紹介します。

①身近な鳥

１年中見られる鳥のなかで一番身近と言えばスズメですが、ほかにも、くちばしがオレンジで、田んぼの近くでよく群れているムクドリ、「ヒーヨヒーヨ」と大きな声で鳴くヒヨドリ、「デデー、ポッポー」と特徴のある鳴き声のキジバトなどは人里でよく見られる鳥の代表と言っていいでしょう。都留市の鳥でもあるウグイスは、姿はあまり見ませんが、春のさえずりはだれもが聞いたことがあるでしょう。セキレイのなかまも水辺などでよく見かけます。歩くのが上手で、おしり（尾羽）をふりながら軽快に歩きます。

②森の鳥

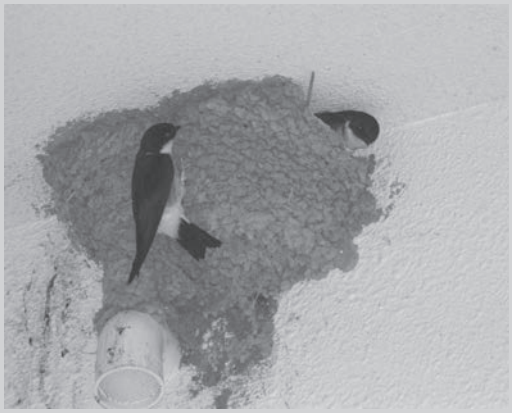
森に入ると、街なかでは見られない鳥に出会うことができます。カケスは、白と青のグラデーションがとてもきれいな羽を持っていて、「ゲーゲー」という鳴き声を出します。キツツキのなかまもいます。

ヤマガラは、山で普通に見かける鳥です。フクロウの鳴き声は時折聞くことができますが、姿はなかなか見ることができません。

アカゲラ

シジュウカラ

ヤマガラの巣箱



イワツバメ

③夏鳥

夏を日本で過ごし、子育てをする鳥を「夏鳥」と言います。代表はやはりツバメでしょう。都留にはツバメとイワツバメがいます。猫やカラスなどの敵に襲われないように、人の出入りのある場所に巣をつくるようです。「トッキョキョカキョク」と特徴のある声で夏の訪れを知らせてくれるホトトギス、昆虫を食べるフクロウのなかまのアオバズクなどは、夏にしか見ることができません。

④冬鳥

夏鳥と逆に、秋に北の国から渡ってきて冬を日本で過ごす鳥を「冬鳥」と言います。オレンジが目立ち、人家のそばによく来るジョウビタキ、カモのなかまなどが代表的です。

鳥のなかまは、親子の関係も深く、子育てに一生懸命です。身近につくられた巣や、山に巣箱を掛けて観察すると、住んでいる場所や狩りのしかたによって運んでくる餌が違っていることがわかります。ほかの生きものとのつながりもよくわかります。

小口尚良（東桂小学校教諭）＝文・写真

カシラダカ

フクロウ

フィールド暦

10 月・11 月に大学周辺を散歩しました。清々しく青空が広がる秋晴れは、とびっきりの散歩日和。自然と足どりが軽くなります。道ばたに目をむければ、のびのびと活動をしている生きものたちの姿がありました。

前澤志依（国文学科 1 年）＝文・写真

ハキダメギク
2010.11.02　都留市田原

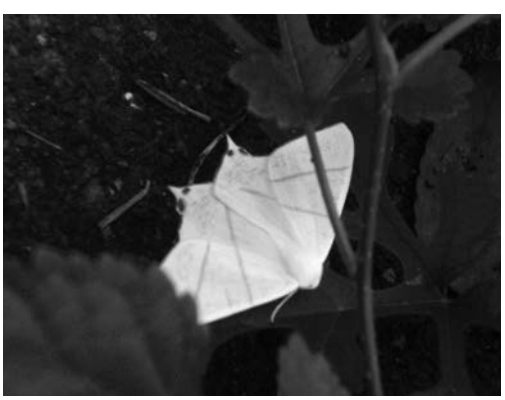
小さな花びらの先はギザギザとしています。寺川の壁で見つけました。壁をつたって根を張っていたのに生命力の強さを感じました。

ヒメジョオン
2010.11.03　都留市田原

6 月ころから咲き出し、秋でもよく見かけるキク科の植物です。花は白やピンク色をしています。ときどき、一つの花に 2 色が混ざり合っているものも見かけました。

セイタカアワダチソウ
2010.10.23　都留市駅の裏通り

外来種です。一面に広がる黄色の花はとても鮮やかでした。高さは、160㎝ほどある私の身長を追い越していました。枯れるとビールの「泡立ち」のようになるそうです。



ウスキツバメエダシャク
2010.10.29　都留市田原

羽化したばかりなのか、近づいてもじっと葉にとまったままでした。真っ白な羽に通るスジがアクセントとなっています。蛾であることをしばしば忘れるほどとても綺麗です。

キタテハ
2010.11.06　都留文科大学前駅のビオトープ

枯れ葉色に黒い斑点模様が特徴的です。この日は花の蜜を吸いに来たらしく、ほかにも 2、3 匹のキタテハが周辺を飛んでいました。成虫のまま冬を越します。

くっつく種子

植物のなかには、種子を動物や人の衣服につけて散布するものがいます。散歩していると、いくつかのくっつく植物に出会いました。

アメリカセンダングサ
2010.11.14　都留市田原

濃い黄色の花と、青々とした長い葉が印象深いです。花の先は触るとチクチクしています。花が咲いている方向を歩くと、細々とした長い種子がつきます。

コセンダングサ
2010.11.16　都留市田原

草むらから勢いよく道に飛び出して生えていました。アメリカセンダングサよりも、薄い色をしています。枝先に小さな花が集まっているので、一度にたくさんの黄色い種子が衣服にくっつきます。

ヒカゲイノコヅチ
2010.11.03　都留市田原

種子の先端が下向きに尖っているので、動物や人の衣服にくっつきやすいです。とくに乾燥後はよくつきます。一度くっつくとなかなかとれません。

麦のこと

8月5日、収穫した麦が小麦粉に挽きあがりました。製粉所の小俣（おまた）トシコさん（84）にでき具合を尋ねたところ、昨年度とまではいかないが「まずまずのでき」との評価をいただきました。そして再び麦づくりが始まる季節。11月5日に麦まきをおこない、26日には肥料としておからをまきました。今年の夏、さらにいい麦が収穫できるよう、世話を続けていきたいと思います。　（牛丸景太）

稲刈り

11月4日、この地区のほかの田んぼと比べたら少し遅いですが、6月に苗床をつくった稲が収穫の時期を迎えました。フィールド作業でお世話になっている渡邊宗男（わたなべむねお）さん（80）にご指導いただきながら稲を刈り、刈ったものを藁（わら）でまとめてウマにかけます。渡邊さんから、今までで一番いいと褒めてもらった今年度のお米。前回の2倍近くとれました。　（石川あすか）

脱穀

11月14日、米づくりの作業もいよいよ大詰め。脱穀をおこないました。干してあった稲の束を脱穀機に入れると、あっという間に藁（わら）と籾（もみ）にわかれていきます。なかには2回脱穀機にかけないと籾がとれないものもありました。収穫できた量は、1袋30kgほどの米袋が3つと半分。後日、渡邊さんに精米していただいて、おいしくいただきました。　（前澤志依）

モグラ塚があった

11月30日、本学の本部棟前広場（赤広）にモグラ塚がありました。モグラがトンネルを掘ったときに、あまった土を地表に押し出してできたものです。こんな身近な地面の下にモグラが住んでいるのかと思うとワクワクします。モグラ塚の土は、よく耕されていてふかふかでした。この冬はコミュニケーションホールのまわりにも見つけました。今後もあたたかく見守っていきます。（尾﨑万奈）

Field Note News

2010.8 ～ 12　　フィールド・ノート編集部＝文・写真

参観日のこと

10 月 23 日、谷村第一小学校の土曜参観がありました。小学校の先生に招待していただき、4 年生の授業を見学しました。内容は、見学に来てくれたかたに、子どものころに何をして遊んでいたのかをインタビューするというもの。20 年以上前の子どもたちは川に行ったり、自分たちでものを作ったりと、自分たちだけの遊びをたくさんしていたとのこと。今ではなかなかできない遊びに、子どもたちはとても興味津々で、見学していた私も微笑ましくなりました。

（前澤志依）

観察会「秋の山を歩こう！」

11 月 6 日は、市民のかたとキャンパス周辺を歩く「秋の山を歩こう」というイベントがおこなわれました。参加者は市民のかた 4 名、スタッフ 10 名の計 14 名です。木々が紅葉し始めた穏やかな秋晴れのなかで、3 時間ほど歩きました。同じ道を歩いていても、気になるものはそれぞれ違います。みんなで歩いて気づいたことを共有すると、ひとりで歩くときには気がつかなかったものやふだん気にかけることの少ない音に目を向けることができました。

（尾﨑万奈）

ムササビ観察会

12 月 4 日、富士急行主催で本学協力のもと、ムササビ観察会を開催しました。当日は、小学生から大人まで幅広い年代の参加がありました。まず駅舎で学生スタッフがムササビの特徴について紹介したのち、観察場所である今宮神社に移動して、参加者と一緒にムササビの糞や食痕を探しました。日没後、観察を始めると、事前観察のときよりもたくさんのムササビの滑空に出会うことができました。参加者のかたと小さな声で「あっ、飛んだ！」と驚きや感動を共有することができ、心が温まりました。

（千葉真希）

FIELD・NOTE
no.68 Mar.

発行人
北垣憲仁〔34-35〕
統括編集者
西教生〔32-33〕
編集長
西丸尭宏〔2-3,22-23,30-35,47〕
石川あすか〔4-5,12-19,36-38〕
副編集長
北村彩乃〔36-38〕
香西恵〔4-5,9-11,15-19〕
編集
桜井明子〔20-23〕
狩野慶〔1,4-5,15-19,48〕
尾﨑万奈〔44-45〕
千葉真希〔44-46〕
市太佐知〔4-5,15-19,36-38〕
岩下瑞枝〔24-25〕
工藤明日香〔19〕
真方美智子〔44-46〕
大澤かおり〔4-8,19,40-41〕
﨑田史浩〔46〕
藤森美紀〔26-27〕
牛丸景太〔28-29〕
前澤志依〔20-23,42-43〕
ロゴデザイン
工藤真純

FIELD・NOTE（フィールド・ノート）
発行日：2011年1月1日
発行部数：400部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

○お詫びと訂正
前号（66号）の3頁において、特集名および30、31頁のタイトルに間違いがありました。ここに記してお詫び申し上げます。

8周年にちなみ、8年前のこと。2002年に何していた？

8年前のこの季節に、初めて引っ越しを経験しました。夢にまで見た2階建ての家、自分の部屋、机、ベッド……。最初のころは新鮮でうれしくて、自分だけの空間にずっと浸っていたいほどでした。でも、それが続いたのも数日のあいだだけ。いつのまにか、自分の部屋にいるよりも、家族みんなでコタツのなかでおしくらまんじゅうをする時間のほうが長くなりました。「2階建てにした意味がないね」と、母は冗談混じりに言うので、私はあのときも今も笑ってごまかしています。　（前澤志依）

周囲にあったささいなことしか思い出せません。70年代ドラマに使われた、古びた中学校舎や、黄昏に染まる教室でホルンケースに潜んだ私小説を読んだことなど。兄のしていたゲーム、先生の舌打ちの回数について。曇った窓に書いた絵。一生懸命だった些事の断片を、案外今でも記憶しています。どうも自分の見ているものが、不明瞭だということだけは分かるようになったのが、中学二年のあのころでした。　（市太佐知）

年月が流れるのは早いものです。8年前ぼくは小学5年生で、ちょうどFIFAワールドカップ日韓大会が開催されていました。担任の先生がサッカー好きだったこともあり、授業を2コマ使って日本×トルコ戦を観戦することに。みんなテレビに向かって必死に応援し、クラスは大いに盛り上がりました。結局日本代表は0－1で負けてしまったけれど、みんなで応援したときの、あの一体感はいまでも忘れられません。　（牛丸景太）

©2011『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

「三つ峠と田原・十日市場を望む」　2010 年 11 月 11 日

次回予告 NEXT ISSUE

特集

原点（仮）

「歩き、見て、聞いて」広がる世界

わたしたちが大切にしてきた「歩き、見て、聞く」という原点。
思いおもいに街や自然を歩きながら、『フィールド・ノート』の原点を探っていきます。

2011年2月末発行予定

FIELD·NOTE no. 67

発行日 2011 年 1 月 1 日（年 4 回発行）
発行所 〒 402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学　コミュニケーションホール地下 1 階
地域交流研究センター　フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』 編集部

「Studio Y.E'S」より近くの山林を望む